

## 目 次

### 論文

ブラジルの聖人札における命令文 ..... 彌永史郎	1
-------------------------------	---

### 報告

京都外国語大学におけるポルトガル語統一試験 CEFR 参照レベルと考査方法 ..... ペドロ・アイレス、彌永史郎、上田寿美	19
--	----

### 書評

金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』—虚構のことばに対する 違和感を取り除き日本語の多様性を見つめ直す— ..... 岐部 雅之	39
Johannes Kabatek and Albert Wall (ed.) <i>Manual of Brazilian Portuguese Linguistics</i> , 2022, Berlin: De Gruyter	..... 黒澤 直俊 45
Jeferson Tenório, <i>O avesso da pele</i> , Companhia das Letras, 2020 ..... 伊藤 秋仁	51
クラリッセ・リスペクトル『ソフィアの災難』 福嶋伸洋/武田千香編訳 (河出書房新社、2024)	..... 江口 佳子 59
拝野寿美子『継承ポルトガル語の世界—地域とつながり 異文化間を生きる力を育む』..... フェリッペ・モッタ	67
山本直子著『「多文化共生」言説を問い直す：日系ブラジル人 第二世代・支援の功罪・主体的な社会編入』(明石書店・2024年) ..... 拝野 寿美子	73
ヴァレーラ、ドラウジオ『女囚たち—ブラジル女性刑務所の真 実—』伊藤秋仁訳 (水声社・2023年)	..... 渡会 環 79
学会報告他	84
学会規約	87
Anais 投稿規程	90
役員一覧, 執筆者一覧	92



## ブラジルの聖人札における命令文<sup>1</sup>

彌永史郎

### I. はじめに

国民の65%がカトリック教徒といわれるブラジルにおいて、人々のあいだで様々な聖人が信仰を集めていることはよく知られた事実である<sup>2</sup>。ブラジル国体の守護聖女、アパレシーダの聖母、ブラジル陸軍の守護聖女、無原罪懐胎の聖母、リオデジャネイロ市の守護聖人たる聖セバスティアヌス、サンパウロ市の守護聖人、聖パウロ、リスボン市の聖ウインケンティウスなど、カトリックを奉ずる国家の常であるが、様々な機関や自治体が守護聖人を持っている<sup>3</sup>。個人が自分の誕生日にちなんだ聖人・聖女を守護とする場合もあろう。

さらに民間では、たとえば女性のあいだに深く浸透した庶民的な聖アントニウス信仰は、ヨーロッパから伝播してから民衆的で素朴な崇拜習俗が加わり、独自の形態を見せている<sup>4</sup>。こうして、数ある聖人・聖女がそれぞれに特有の分野で大衆の日常的な祈りに応えるとい

1. 本稿は2020年3月29日、日本ポルトガル・ブラジル学会関西部会での発表に基づく。なお「聖人札」の名称については本論の注6を参照。
2. カトリック約65%、プロテスタント約22%、無宗教8% (ブラジル地理統計院、2010年)。出典：外務省ブラジル基礎データ (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/data.html>) 2022/05/22 取得。
3. アパレシーダの聖母 (Nossa Senhora de Aparecida)、無原罪懐胎の聖母 (Nossa Senhora da Imaculada Conceição)、聖セバスティアヌス(São Sebastião)、聖パウロ(São Paulo)、聖ウインケンティウス(São Vicente)。聖ウインケンティウスについては彌永(1991)参照。
4. 聖アントニウス (Santo António | Antônio) はポルトガル語圏ではもともと人気のある聖人のひとりとして、とりわけ縁結びの聖者 (Santo Casamenteiro) として若い女性を中心に信仰を集めている。周知の通りポルトガル語圏では出生地にちなんで Santo António de Lisboa として知られるが、生涯を終えた地にちなんで S. António de Padova としても知られる。ブラジルでは同聖人にかけての願いをより効果的に成就させるためには、幼子イエスを抱える聖アントニウスの像から、幼子を取り去っておく(願いが成就したら幼子をもとに戻す)、また像そのものを逆さにして井戸に沈めたり冷蔵庫に入れておく、というような俗習が広く知られている。

うのが、聖人信仰の基本的な姿であろう<sup>5</sup>。このような聖人信仰を支えているのは、さまざまな聖人を祀った教会はもとより、あちこちの教会で配布される聖人札である<sup>6</sup>。

## II. 聖人札



図1 聖人札 (Santinho) の見本

聖女についての解説、すなわち、そのご利益、祈りの方法などを示したものである。

大衆向けの、わかりやすい構成で、それでいて聖人への畏敬の念を保った擬古文的文語表現でまとめられたものである<sup>7</sup>。聖人・聖女にはそれぞれ専門分野ともいえる範囲での守護としての役割がある。よく知られたところでは、母性の象徴聖母マリアをはじめ交通安全の聖クリスト

本稿においてとりあげる「聖人札」は、ポルトガル語でいう「santinho」あるいは「pagela」の訳語として用いる。

本論で用いる翻訳としての「聖人札」は図1にあるように、概ね名刺大の紙片で表面に色刷りの聖人・聖女の姿が描かれており、裏には聖人・

5. またブラジルでは特にアフリカ系の宗教カンドンブレイ (candomblé) の神々との習合 (sincretismo) がみられ、芸術面でもしばしば取り上げられるテーマである。
6. 日本におけるカトリック教では「御絵 (ごえ)」の名称が一般的である。
7. 本論考で用いたブラジルの聖人札30枚は、Gisele Wolkoff 先生が2019年に現地で収集したものを提供いただいた。また、一部の聖人札のテキスト解釈にはマルコ・カスキーリョ神父にご教示をいただいた。記して深謝したい。

フォロス、疫病封じの聖ロクス、縁結びの聖アントニウス、嵐から身を守る守護聖女、聖女バルバラ、経済苦など日常的苦痛から人を至急救済するという聖エクスペディトゥスなどは、人々の日常生活に深く浸透しているようである<sup>8</sup>。そして聖人札には、こうした現世的な要求に応えるべく具体的な祈りの文句と仕草を含めた願掛けの方法が指南されており、時には「願ほどき」の折には聖人札の印刷の注文をぜひと促す、販売元の宣伝を抜け目なく含む構成のものも見られる<sup>9</sup>。

また聖人札においては、聖人・聖女に対して、それぞれの専門に応じて直接奇跡を行ってくれるように願う方法もあるが、他方、聖人と神との上下関係を重んじて聖人を神への仲介者として位置付け、神へ願いを届けるように依頼するという形をとるものもある<sup>10</sup>。いずれにせよ、こうした超自然的存在に対する祈願を目的とする特殊な文語であるから、一般的に是とされている文語とは質を異にする面がある。必ず叙述的部分と祈願の部分が含まれているだけに、ある使用域に特有の大衆的な文語の姿をよく反映していると言ってよかろう。

### III. 聖人札のテキストの文法的特徴

先に図示した通り、聖人札の表面は基本的に色刷りの聖人・聖女の姿とそれにまつわる寓話的な事物を視覚的に表示すべく、関連する聖人伝説にちなんだ事物、動物、情景などが描かれる。その裏面には、通常は当該聖人の祝日を示し、導入部分では、実際にはどのような場合にその聖人・聖女を頼りとして願をかけるべきか、換言すればその

---

8. 聖母マリーアは「*Nossa Senhora*」のあとにさまざまな限定（「*da Imaculada Conceição*», 「*de Lourdes*», 「*da Fátima*», etc.）が加えられる。ポルトガル語では以下の表記を用いる。聖クリストフォロス（*São Cristóvão*）、聖ロクス（*São Roque*）、聖アントニウス（*Santo António* | *Antônio*）、聖エクスペディトゥス（*Santo Expedito*）。

9. 例えば、*São Jorge* の聖人札の裏面最後には、発行元の電話番号やURLとともに以下のような消費を促す文句が加えられており、聖人札がどのように商業化されているかよくわかる：「*Imprima e distribua um milheiro desta oração e ajude para que outros necessitados aprendam a ter fé.*」 「一束1000枚のこの聖人札を印刷、配布して、他の困っている方々が信仰を得られるようご援助下さい。」

10. Meneses (2011:55).

専門領域と言ってよいところが解説され、引き続き祈祷の文句が連ねられ、その途中で祈りをあげる本人の欲することを挟み込む場所も通常指示されている。例として、ルルドの聖母の聖人札を引用してみよう。なお文語的規範から外れる場合は「sic」と示しそのまま転写する。

例1.

(1) Se você anda perturbado, atormentado, sua vida anda cheia de problemas que sozinho não consegue resolver, e está precisando de equilíbrio e tranquilidade para poder resolvê-los, peça ajuda. O maior dos milagres de Nossa Senhora de Lourdes é dar a paz de espírito que as pessoas precisam para poder trabalhar, estudar e se dedicar à Família.

Oração: Ó Virgem puríssima, Nossa Senhora de Lourdes, que vos dignastes a aparecer a Bernadette, no lugar solitário de uma gruta, para nos lembrar que é no sossego e recolhimento que Deus nos fala e nós falamos com ele, ajudai-nos encontrar (sic) o sossego e a paz da alma e conservar-nos sempre unidos a Deus. Nosso (sic) Senhora de Gruta, dai-me a graça que vos peço tanto preciso (pedir a graça que você deseja). Nossa Senhora de Lourdes, rogai por nós. Amém. Rezar 1 Pai Nosso, 1 Ave Maria e Fazer o Sinal da Cruz<sup>11</sup>.

---

11. 以下参考のために日本語訳を示す。

【解説】あなたが困惑し悩みを抱え、人生に問題が山積しており一人では解決できないようなことがあれば、そしてまた心の平静と平穏を取り戻して問題を解決したいならば、助けを求めなさい。ルルドの聖母の奇跡のうち最大のもは、人々が必要とする心の平和を与え、労働に勉強に、そして家族に献身的に尽くせるようにしてください。

【祈り】汚れなき処女、ルルドの聖母よ、人里離れた洞窟で、ベルナデットのもとに姿をお現しになり、心安らかな瞑想によってこそ神は我々にお話しくださり、また私たちも神と語り合えることができると思い出させて下さいました。どうか私たちが落ち着きと心の平和を見出せるようにお助けください。そして私たちがいつも神と共にいられるようにお助けください。洞窟の聖母さま、どうか私に恩寵を下さいますように、私は何としても（ここに自分の願いをいれる）していただきたいので、私たちに代わって神様をお願いしてください。主の祈りを1回、アヴェマリアの祈りを1回、さらに十字を切ること。

この文章において、前半の解説部分では、この聖人札の製作者という立場から読者に対する助言と解説が極めて普通の文語で書かれているが、特に注目したいのは、後半の «Oração» 以下の祈祷の部分である。そこには対称としての「ルルドの聖母」に対して、まず «vos dignastes» という2人称複数形が用いられている。祈祷文は一種の擬古文的な調子の祈りにふさわしいことばで統一されており、動詞は単数の対象である聖人・聖女に対していわゆる敬称の2人称複数形を用い、直説法・過去形 «dignastes», 命令法 «ajudai-nos», «dai-me», «rogai» が用いられている。

つまり聖人札にはその目的の性質上、必然的に平叙文に加えて「聖人・聖女様、お願いですから～してください（～しないでください）」という多くの祈願が内容の骨子として含まれる。

#### IV. 聖人札における平叙文

すでに述べた通り、聖人札では通常は聖人・聖女を尊称の «vós» で扱う。したがって主語が表示、非表示にかかわらず動詞は2人称複数形が用いられることになる。

- (1) Ó São Jorge, meu Santo Guerreiro, invencível na Fé em Deus, que **trazeis** em Vosso Rosto a esperança e confiança, (...) <sup>12</sup>

しかしながら、以下の(2), (3) におけるように、動詞の形式が、非表示の主語 «vós» ではなく2人称単数形の «tu» に一致するという揺れの例も散見される。

- (2) Do alto desse trono que **reinas** sobre todos os anjos e santos, (...) <sup>13</sup>  
(3) Vós, que **fizeste** o parálítico andar, o morto voltar a viver, (...) <sup>14</sup>

---

12. «São Jorge (1)」の聖人札より引用.

13. N. Sra. da Glória の聖人札より引用. ここでは直説法・現在・2人称・単数形が用いられているが、平叙文の文脈では2人称複数形の «reinais» とあるべきところである. 後続する祈願文では «volvei» と命令法・2人称複数形が用いられている.

14. «Conversa com Jesus」の聖人札より引用.

今回調査した30枚の聖人札に関して、平叙文で用いられる動詞は全部で249件あった。文脈に従って、尊称の2人称複数形の使用を中心として、規範からの揺れの有無をみた。その結果は以下の表1のようにまとめることができる。

表1：祈願札の平叙文：動詞活用形式の規範と揺れ

規則動詞									不規則動詞		
第1活用動詞			第2活用動詞			第3活用動詞					
±規範	件数	%	±規範	件数	%	±規範	件数	%	±規範	件数	%
+	112	99	+	23	100	+	8	100	+	147	98
-	1	1	-	0	0	-	0	0	-	3	2
	<b>113</b>			<b>23</b>			<b>8</b>			<b>150</b>	

(±規範の列では、規範通りの場合+記号、規範から外れる場合を-記号で示し、それぞれの件数ならびに%を示す。)

表にあるとおり、揺れは第1活用動詞において1件、不規則動詞に関して3件と、ごくわずかである。尊称の2人称複数形に関して実例から察せられることは、これらの聖人札の書き手が2人称複数形の活用形式に親しんでいなかったということである。すなわち、基本的には常用口語からは廃れた形式であるため、通常の話し手にとっては特殊な使用域の形式として学ぶ必要がある形式だということが明らかと言えよう<sup>15</sup>。いっぽう不規則動詞に関しては、以下の表2における3例が聖人札の平叙文においてみられたものである。いずれも誤植と思われる程度の微妙な規範からの逸脱と、明らかな知識の不足とを表す例といえる。表では規範から外れた実例を【-規範】の列に、規範に従う形式を【+規範】の列に示す。

15. ブラジルの言語使用において、動詞の一致 (concordância verbal) を使いこなすか否かは学識のある一部のエリート層と学習機会のない非学識層の大衆を水平に分断するひとつの基準として機能するほどであるという。詳しくは、Lucchesi (2015:167)。



表2：不規則動詞の揺れ \*

不定詞	実例【-規範】	【+規範】
ser	és	sois
fazer	fizeste	fizestes
ter	tem	têm

\*規範的には「sois」であるべきところ「és」と表記されていることを示す。

## V. 聖人札における祈願文

すでに述べたとおり、聖人・聖女に対する祈願の指南が聖人札の核をなす内容で、なかでも直接的な祈願が重要である。もっとも重要な内容が表わされる祈願文においては、主語が「vós」であれば、動詞は肯定文では命令法・2人称複数形、否定文では接続法・2人称複数形が用いられることになる<sup>16</sup>。以下の(4)～(10)に典型的な例を引用してみよう<sup>17</sup>。

- (4) **Rogai** por mim que estou tão desolado.
- (5) Não me **deixeis** sozinho nas estradas.
- (6) (...) ó incomparável Mãe, **guardai-me** e **defendei-me** como coisa e propriedade vossa.
- (7) **Assisti-me** nesta grande necessidade, (...)
- (8) Vós que fostes o pai das viúvas **sede** meu pai.
- (9) Senhor, **Fazei-me** instrumento de vossa paz!
- (10) (...) **volvei** para nós os vossos olhos misericordiosos;

16. 命令法の文法的な主語を2人称に限らず3人称の語も含めた「命令法」を表示する方法がとられることもある。Cf. Infopédia の動詞活用表。否定命令文に用いられる形式もすべて含めて表示していくことで、伝統的な規範文法の説明より一層合理的なものになろう。

17. 引用元の聖人札は以下のとおり。(4) São Judas Tadeu-1, (5) São Cristóvão, (6) Rainha da Paz, (7) São Judas Tadeu-2, (8) Santo Onofre, (9) São Francisco de Assis. (10) N. Sra. da Glória.

祈願文は、今回の調査においては160件現れた。2人称複数形という普段接することの稀な動詞の形式で動詞の一致が求められるので、それなりの揺れが観察される。詳しく見ていくと、第1～3活用動詞、不規則活用動詞それぞれについて、ある種の傾向が見られるので、典型的例を以下一例ずつ参照してみたい。

第1活用動詞の例：

(11) **Ajuda-me** a superar estas Horas Difíceis, (...) <sup>18</sup>

第2活用動詞の例：

(12) **Atenda** ao meu pedido: (...) <sup>19</sup>

第3活用動詞の例：

(13) Ó São Jorge, meu Santo Guerreiro, invencível na fé em Deus, que trazeis em vosso rosto a esperança e confiança, **abre** meus caminhos<sup>20</sup>.

不規則動詞の例：

(14) **Fazeis**, Divino Jesus, que antes de terminar essa conversa que terei Convosco durante nove dias, eu alcance esta graça que peço com fé (...) <sup>21</sup>

これらの実例から肯定の祈願文において、主語と動詞の一致の原則に従う場合、従わない場合を含め、どのような動詞の形式が用いられているかをまとめると以下の表3のようになる。

---

18. Santo Expedito の聖人札より引用. «Ajudai-me» とあるべき.

19. Nossa Senhora do Bom Parto の聖人札より引用. «Atendei-me» とあるべき.

20. S. Jorge の聖人札より引用. «abre» は«abri»とあるべき.

21. Conversa com Jesus の聖人札より引用. «Fazeis» は平叙文と読むことも可能だが、文脈から祈願文として、«Fazei»とあるべきと考えられる.

表3：対称詞 «vós» に対する祈願文の動詞活用形式

時称形式	例	主語と動詞の一致
命令法2人称複数形	rogai, dai-me	+ 規範
命令法2人称単数形	socorre-me, ajuda-me	- 規範
接続法2人称複数形	não me deixeis	+ 規範
接続法3人称単数形	interceda, proteja-me, atenda, devolva	- 規範

全体をこのような観点から、すなわち、動詞の一致の原則が規範通り保たれているか否かを調査し表1と同様に分類してみると、以下の表4が得られる。

表4：祈願札の祈願文：動詞の活用形式の規範と揺れ

規則動詞									不規則動詞		
第1活用動詞			第2活用動詞			第3活用動詞					
±規範	件数	%	±規範	件数	%	±規範	件数	%	±規範	件数	%
+	69	97	+	27	71	+	8	67	+	37	97
-	2	3	-	11	29	-	4	33	-	1	3
	<b>71</b>			<b>38</b>			<b>12</b>			<b>38</b>	

(±の記号については表1と同様)

上記の表4から明らかなように、第1活用動詞については、全体の3%相当のごくわずかな揺れが見られ、具体的には、「Ajuda-me...」が同一の聖人札に2例見つかるのみである<sup>22</sup>。

いっぽう第2活用動詞については、揺れの例が比較的多く見られ、「socorre-me», «atenda», «interceda», «proteja-me」という形が繰り返し現れる。

さらに第3活用動詞では «abra», «assiste-me», «imprime」などであり、特に «abra» は複数の聖人札において見られる。

22. S. Expedito. ex: «Ajuda-me a superar estas Horas Difíceis, (...)».

不規則動詞については、37の祈願文のうち揺れは «fazeis» のみで、その他の聖人札では «dai-me», «fazei» など規範通りの形式が用いられており揺れは見られない<sup>23</sup>。

## VI. 祈願文における活用形式の揺れ

一般的な規範文法に従えば、表3で見られる主語と動詞が一致していない命令法・2人称単数形、接続法・3人称単数形に分かれているものを、すべて命令法・2人称複数形に統一せねばならない。しかしながら、常用口語に起源をもつと思われるこの種の「乱れ」が30枚の聖人札をみると様々な形で分布しているのである<sup>24</sup>。

こうした乱れがなぜ生ずるかを考えると、まず第一に、2人称複数形という形式が文語においてもまれであって、とりわけ常用口語の使用域で触れる機会がないことがまず挙げられよう。さらに重要なことは、とりわけ、第2活用動詞と第3活用動詞の活用語尾が、それぞれ «-ei», «-i» となり、以下の表5に見られるように、第2活用動詞の命令法・2人称複数形は第1活用動詞の直説法・過去・1人称単数形の活用語尾と部分的に重なり、また第3活用動詞の命令法・2人称複数形は第3活用動詞の直説法・過去・1人称単数形と完全に重複する点である。

表5：命令法の語末形式

		命令法・2 pl.			命令法・2 pl.
第2活用動詞	atender	atendei	第3活用動詞	abrir	abri
	proteger	protegei		assistir	assisti
	socorrer	socorrei		imprimir	imprimi

23. Conversa com Jesus. ex: «Fazeis (...) que (...) eu alcance esta graça (...)»

24. 常用口語については彌永 (2022:64).

仮に規範文法の知識が十分でないとする、《atendei》 という形式の末尾の《-ei》から、実際には存在しない不定詞の《\*atendar》の直説法・過去・1人称単数形が想起されれば、迷いが生じるに違いない。さらに《cê》, 《ocê》で待遇する相手に用いる《atende》, 《protege》では聖人に対してはふさわしくないと直感され、より格式張った場面で《você》, 《o senhor》などに対して用いる接続法の《atenda》, 《proteja》を用いるほうが望ましいという判断が行われる、というのがこうした逸脱の理由といえる。修正の方向が外れた結果の一種の過剰修正といえよう。

さらに第3活用動詞の場合は、命令法・2人称複数形が直説法・過去・1人称単数形とすべて重複している。規範文法に十分通じていない話者であれば、常用口語<sup>25</sup>の使用域で馴染みの深いこれらの直説法・過去・1人称単数形《(eu) abri》, 《(eu) assisti》などと重複している形式を、《vós》で敬って扱うべき聖人・聖女という対象詞に、祈願という文脈で使用することに当然のことながら躊躇が生ずる。そもそも常用口語で親しい相手は通常《cê》, 《ocê》で待遇し、これらの話し相手に対する遠慮のない依頼、命令などの場合、命令法・2人称単数形と同形の《abre》, 《assiste》を用いる。さらには音声的に比較すれば、これらの活用形式は *abre /'abri/* に対して *abri /a'bri/*, *assiste /a'sistʃi/* に対して *assisti /asis'tʃi/* が存在するので、強勢の位置のみによって対立する最小対ができる。したがって、こうした常用口語の使用域とは異なる聖人・聖女という「尊い」相手を言語的にいかに扱うべきかという問題に直面した話者は、以下のような方法で迷いを解決する。すなわち改まった場面において話し相手を《você》や《o senhor, a senhora》で待遇するときに用いる、丁寧な依頼の方法を選び、接続法の活用形式《abra》, 《assista》などを用いることにするのである。こうした手段によって話者はふたつの面で問題を解消できる。つまり《(eu) abri》, 《(eu)

---

25. 本稿で用いる常用口語、標準口語は Silva (2004), p. 43-63. による「常用規範 (norma vernácula)」と「標準規範 (norma culta)」の区別に依る。

assisti》という主語の間違いという不安を解消でき、さらには親しい友達相手用の《abre》, 《assiste》とは異なる改まった場面用の接続法の活用形式《abra》, 《assista》を使いこなすことにより、フォーマルで正しい表現を用いて、間違いのない待遇表現ができたという心理的な安心感を得ることができよう。このように主語と動詞の一致の欠如は典型的な過剰修正 (hypercorrection) の例として理解することができる。

## VII. 結論

以上、ブラジルで流布する聖人札をつぶさに観察し、通常の誤植の範囲を大きくはずれ、相当に高い頻度で見られる規範からの逸脱の実情を記述した。以下のグラフで示すように結果として、常用口語の使用者による過剰修正が原因と思われる規範文法からのずれが、特に第2、第3活用動詞で相当な頻度で認められた。

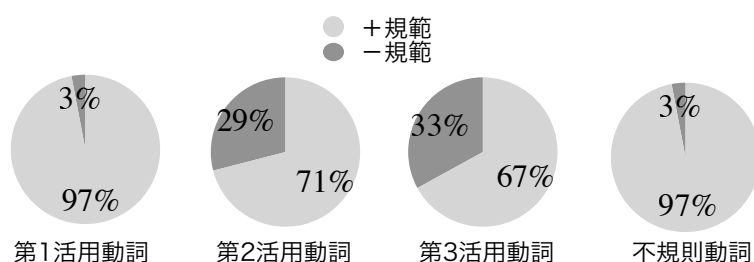


図2：祈願文の動詞活用形式：【+規範】vs【-規範】

しかしながら、この揺れが一つの傾向として規範的体系全体を上書きしていくほどのうねりをもつ力であるかという点、多くの文法家と同様、筆者も懐疑的にならざるを得ない。規範的体系は学校教育の場で繰り返し正規の知識として与えられ続ける。高等教育を受けた国民の一部にとっては本稿でみた文法的揺れは単純な知識不足、間違いと判断される。動詞の一致を使いこなすことがエリートの条件であれば、

その反対にこうした文法規則から逸脱した言語使用自体が不名誉なレッテルとなっていることも事実である。国民の非識字率がいまだに推定で6.6%(2019)と言われるブラジルにおいて、国民の教育に対する熱意は今後も確実に高まっていくであろう。また、高等教育を受けたエリート層が国民の17.4%(2019)とすると、大学教育も今後ますます発展し、結果的には幅広い階層の人々が高等教育をつうじて規範を使いこなすことを求めようとするのはきわめて当然の成り行きである<sup>26</sup>。

加えてカトリック教会における聖職者たちの規範に対する意識は一般に比べて格段に高いことは言うまでもない。今回扱った聖人札に見られる逸脱は聖職者たちの目に触れれば必ずや修正されるべき性質のものとなるであろう。

一般的には2人称の代名詞は単数形・複数形ともに現代のブラジルのポルトガル語では廃れた、と言われる<sup>27</sup>。しかしながら、単数形は規範的な動詞の一致を保って用いられている地方と、動詞の活用形式は3人称単数形に置き換わっている場合とがあると言われる。このような常用口語の使用域において様々な言語的変種が共存する中で、いわゆる標準口語、すなわち、知的エリート層の使いこなすフォーマルなポルトガル語の口語において動詞活用の簡略化が受け入れられ大きく変化して行くということは容易ではなかろう。「主語と動詞の一致」という文法的規則を使いこなせるか否かは高等教育を受けたエリートの証であり、ブラジル社会を水平に分断する言語的特徴であると言われる<sup>28</sup>。したがって常用口語における動詞活用形式の簡略化を口語であれ文語であれ、標準的な使用域のポルトガル語に取り入れるということは、一種の既得権の放棄にも繋がり、簡単には受け入れがた

26. 統計資料はブラジル地理統計院 IBGE - Instituto Brasileiro de Geografia e EstatísticaのHPより取得：<https://educa.ibge.gov.br/jovens/conheca-o-brasil/populacao/18317-educacao.html> (2 de agosto de 2022).

27. ブラジル口語の命令文については、彌永・ロドリゲス (2023), p. 369-374 参照.

28. «A concordância verbal é um aspecto linguístico que divide a sociedade brasileira, horizontalmente. Enquanto a elite letrada emprega quase sempre a regra de concordância, essa regra é muito pouco encontrada na fala dos segmentos populares sem acesso à cidadania e à educação escolar.» in: Lucchesi (2015:167-8).

いものとなろう。加うるに正統派の宗教的な環境において、伝統的な標準ポルトガル語の文語規範がこの種の変化を是とするとも到底考えられない。教育が浸透するにつれ中等教育以降で親しむことになる時代劇、古文調の表現などにおいて、尊称の «vós» はひとつの重要な標識として学習され、その知識は継承されていくに違いない。

また、外国語としてのポルトガル語を教育の現場において、文法体系全体の均衡を踏まえれば、単数形、複数形ともに2人称の代名詞を「使用頻度が低いあるいはすでに廃れた形式」として扱い、対応する動詞活用形式を不要なものとして除外しておくことは正しい知見に基づいておらず、かえって非合理的な方法であることが明らかである。なぜなら外国語としての学習者とはいえ、結局はけっして消失することがない動詞形式について知らずに済ませることはできず、いずれ学び直す必要に迫られるからである。

## 付録

### 聖エクスペディトゥスの聖人札<sup>29</sup>

Oração a Santo Expedito

Festa 19 de Abril. Comemora-se todo dia 19.

Se você está com algum Problema de difícil solução e precisa de Ajuda Urgente, peça esta ajuda a Santo Expedito que é o Santo dos Negócios que precisam de Pronta Solução e cuja invocação nunca é tardia.

Oração: — Meu Santo Expedito das Causas Justas e Urgentes, **Socore-me** nesta Hora de Aflição e desespero, **interceda** por

---

29. 聖エクスペディトゥス (ポルトガル語では Santo Expedito)。ブラジルではよく知られた聖人であるが、その生涯についてはよく知られていないといわれる。以下、*Notícia do Vaticano* より引用：«Não se sabe muito sobre este santo, martirizado em Melitene, Armênia, no século III, junto com Elpídio e Hermógenes. Ele é representado com roupas militares, enquanto esmaga um corvo, que grita «amanhã» ou com uma cruz ou relógio, que indica «hoje». Por isso, é invocado para causas urgentes.» (<https://www.vaticannews.va/pt/santo-do-dia/04/19.html>, obtido a 3 de agosto de 2022)



mimjunto ao Nosso Senhor JESUS CRISTO. Vós que **sois** um Santo Guerreiro. Vós que **sois** o Santo dos Afritos, Vós **que** sois o Santo dos Desesperados, Vós que **sois** o Santo das Causas Urgentes, **Proteja-me, Ajuda-me, Dai-me** Força, Coragem, e Serenidade. **Atenda** ao meu pedido: "Fazer o Pedido". **Ajuda-me** a superar estas Horas Difíceis, **proteja-me** de todos que possam me prejudicar, **Proteja** a Minha Família, **atenda** ao meu pedido com urgência. **Devolva-me** a Paz e a Tranquilidade. Serei grato pelo resto de minha vida e levarei **seu** nome a todos que tem fé. Muito Obrigado. **Rezar** 1 Pai Nosso; 1 Ave Maria e **fazer** o Sinal da Cruz<sup>30</sup>.

#### 【解説】

日常の差し迫った状況で急ぎ解決を望む場合、多くの人々が願掛けをする対象の聖人として知られている。エクスペディトゥスが掲げる十字架に「HODIE (hoje, neste momento)」と書かれ、聖者が足で踏みつけているからすが「CRAS (amanhã)」と啼いている様子には滑稽な面白さもある。大衆的な人気があるだけに、さまざまな版の聖人札が流布し

---

30. 以下参考のために日本語訳を示す。

#### 【聖エクスペディトゥスへの祈祷】

祭日、4月19日。毎月19日に祝う。

もしもあなたが何か解決し難い問題を抱えていてすぐに助けを必要とするのなら、その助けは聖エクスペディトゥスにお願いなさってください。この聖人は即決を要する事業の守護聖人であり、その助けを求めるのに時期がすでに遅しということは決してありません。

【祈祷】正当で緊急な大義の救い主、我が聖エクスペディトゥス様、この苦しみと絶望の時、私をお救いください。そして私に代わって我が主イエスキリストに願いを届けてください。あなた様は聖なる兵士です。苦悩を救う聖人様、絶望から救ってくださる聖人様。あなた様は至急の用事の聖人様。私を守り、私を助け、力、勇気と安らぎを与えてください。私の願いを叶えてください。『ここに自分の願いを入れる』。この困難な時を乗り越えるべく私をお助けください。私を痛めつけようという全ての事柄から私をお守りください。私の家族をお守りください。私の願いを叶えてください。私に平安と静けさを取り戻してください。そうすれば一生私は感謝いたしますし、あなたの名前を信仰のある人々すべてに伝えましょう。どうかお願いいたします。『ここで主の祈りとアヴェマリアの祈りを唱えた上で十字を切ること。』

ているようだが、冒頭に示した版に比して、上記の版はとりわけ常用口語的な用法の混用が多い。

### 参考文献

彌永史郎 (1991) 「聖ウィンケンティウス伝説とからす — ポルトガルの場合 —」 京都外国語大学『研究論叢』第36号.

彌永史郎 (2015) 『ポルトガル語四週間』 大学書林.

彌永史郎 (2022) 『基礎ポルトガル語文法』 西東舎.

彌永史郎、ジョゼー・ロドリゲス共著. (2023) 『ポルトガル語のジェスチュア — ポルトガル・ブラジル』 西東舎.

MENEZES, Renata de Castros (2011). A imagem sagrada na era da reprodutividade técnica: sobre santinhos. in: *Horizontes Antropológicos*. Porto Alegre, ano 17, n. 36, p. 43-65, jul./dez.

ヤコブス・デ・ウォラギネ (1979) 『黄金伝説1〜4』 前田敬作ほか訳 京都 人文書院.

AMEAL, João (1957) *Santos Portugueses* Porto: Liv. Tavares Martins.

LUCCHESI, Dante (2015). A variação na concordância verbal no português popular da cidade de Salvador. in: *Estudos linguísticos e literários*. n.º. 52, ago-dez, Salvador, p. 166-204.

SILVA, Matos e (2004). *Ensaio para uma sócio-história do português brasileiro*. São Paulo: Palábora Editora.

## «Sumário»

### **Imperatividade no texto de «santinhos» brasileiros.**

Shiro Iyanaga

Os santinhos, ou pagelas, distribuídos nas igrejas católicas brasileiras são pequenas estampas de papel do tamanho de um cartão de visita. Na sua superfície afigura-se a imagem colorida de um santo impresso e no verso há um texto onde se sugere aos crentes o modo de pedir graça aos respetivos santos. Do ponto de vista linguístico, o texto de santinhos constitui imprescindíveis exemplos da língua escrita diariamente praticada no Brasil, especialmente no que respeita ao seu aspeto vernáculo. Focalizando-se no uso do Imperativo, muito frequente em textos deste gênero, devido à sua função de solicitar a graça das entidades sagradas, analizámos estatisticamente a oscilação de acordo com os textos de 30 santinhos. Revelou-se que há uma considerável oscilação entre a norma e o uso popular, sendo que o autor acredita que a gramática prescritiva, embora parcialmente desarticulada, não se transformará facilmente, devido à tácita força conservadora e reparadora, conforme a qual a classe letrada se mantém em uma forte posição sócio-económica, apesar de alguns escassos desvios informais.



【報告】

## 京都外国語大学におけるポルトガル語統一試験 CEFR参照レベルと考查方法<sup>1</sup>

ペドロ・アイレス、彌永史郎、上田寿美

### 1. はじめに

本年度新規に採択された科学研究費のテーマ「ポルトガル語の理想的な言語教育シラバスに基いた科学的教育基盤形成」に基づき理想的言語教育シラバスに直結した成績評価の実態について考察したい。学生にとっても教師にとっても一大関心事である成績評価については、当然のことながら基準が必要である。授業シラバスには達成度の範囲を踏まえた計画が記され、これに基づく「学習範囲」のなかで、いかに問題を作成すべきかは各授業の担当教員に任されており、その考查内容はもとより、問題形式すなわち、記述式問題、客観式問題の割合なども担当者に一任されているのが現状である。

京都外国語大学では学生の達成度に関してCEFRの基準に基づいたベンチマーク（3段階：elementary, intermediate, advanced）と呼ばれる独自の達成基準を設けているが、基準自体は抽象的な表現によっており、具体的内容は担当教員の経験則に委ねられている。いっぽうで、達成度を考查するための具体的な問題作成については、教員相互の情報共有を密にする工夫も行われて来た<sup>2</sup>。

いっぽう京都外国語大学では「統一試験」という習熟度認定試験が2015年より学科ごとに行われており、その成績をクラス分けや授業登

- 
1. 2023年度基盤研究(B)「ポルトガル語の理想的な言語教育シラバスに基いた科学的教育基盤形成」(上智大学 市之瀬敦、課題番号23H00646, 令和5年度～令和9年度) なお本稿は2023年6月24日の共同発表(アイレス、上田、彌永)に基づく報告書である。
  2. 京都外国語大学ブラジルポルトガル語学科では、2003年より学科教員有志の「問題研究会」が行われてきた。これについては本稿「5. 統一試験の実際」で論じる。

録要件、ひいては卒業要件として用いている。本稿では、8年目となったこの試験実施・作問実績を踏まえ、統一試験をはじめとする考査に関わる諸問題を概観し、現行の指標の一層の改善、科研テーマにある「理想的な言語教育シラバス」との関連を考察したい。

## 2. 統一試験：CEFRと大学独自の基準の関係

京都外国語大学で行われる統一試験は、2014年のカリキュラム改訂とともに開始された。本稿では制度的な意味については深く触れないが、CEFRと本学独自の資格試験との対応について以下概観したい。

表1にみられるとおり、京都外大では、「KUF S言語共通ベンチマーク」という名称のもとに、各学年終了時の学習レベルをそれぞれのCEFR参照レベルに対応させている。また、1年次修了時点で外国語学部の学生には「統一試験」という習熟度認定試験が義務化されている。この試験は100点満点で、学生の専攻外国語習熟度を考査し、学生に対する学習へのインセンティブを与えるだけでなく、2年次以降の学生生活に大きな影響を与える要件として用いられる。たとえば2年次以降から選択できる科目が、インターミディエイト（中級）保持者、アドヴァンスト（上級）保持者というレベル別に分けられてい

表1 KUF S統一試験とその他基準との対応関係

KUF S言語共通ベンチマーク	1年次終了時 (A1)	2年次終了時 (A2)	3年次終了時(B1)	4年次終了時 (B2)
京都外大の科目履修基準	インターミディエイト	アドヴァンスト		
ブラジルポルトガル語学科	統一試験 55点以上	統一試験 80点以上		
CAPLE (外国語としてのポルトガル語検定試験)	日本では実施されず	準初級以上 (A2)	初級以上 (B1)	

るため、中級を取得していないと特定の科目が履修できない場合がある<sup>3</sup>。

具体的な制限について例をあげてみたい。たとえば統一試験55点以上でなければ、二年次以降に中級向け科目を選択することができない。したがって、2年次で初級となっている学生は、2年次のうちに外部検定試験A1レベル以上あるいは統一試験55点以上取得が必須となる。この条件を満たしていないと3年次になっても中級以上の学生向けに指定されている科目が履修できず、必要単位を満たすことができない。結果的に4年次になったとしても卒業に必要な単位全てを取得できないため留年が確定してしまうからである。

スペイン語やフランス語など他学科では、日本の団体が行う検定試験などをはじめとする、CEFR参照レベルに相当する外部の試験で認定を受ければ、統一試験に変えることも可能だが、ポルトガル語はA1に相当する試験が日本では実施されていないため、統一試験を受験する必要がある。当然、CAPLEのA2レベルの試験に合格すれば、統一試験中級とみなせるが、1年次を修了したばかりの初習外国語学習者には困難な水準といえよう。

外国語学習をそのまま当該外国での生活に直結させるというCEFRの画一的な基準のたてかたについても、日本におけるポルトガル語学習者にとって、必ずしも望ましいものとは言えないであろう。実際に、履修者全員が将来当該国で生活することを目的としているとは限らず、訪日旅行者への対応や、ポルトガル語テキストの読解あるいは、日本に居住するポルトガル語母語話者に対する支援なども重要な目的となりうる。したがって当該言語圏での生活を前提としたCEFRの「コミュニケーション」に重点をおいた「達成基準」が学習者の全ての要求を満たすとも言えないのである<sup>4</sup>。

---

3. 実際の科目履修についての要件としては、中級合格が条件として意味を持つ。試験の結果が初級の点数の学生は年に2回、7月と1月に行われる統一試験を受験して、できるだけ早く中級を取得する必要がある。

4. ブラジル文部省の行う検定試験 CELPE-Bras にも同様の問題がある。

したがって学内の統一試験は、こうした日本人のポルトガル語初習者の広範な目的に応じうる、いわゆる語学力、すなわち初習外国語の単なる運用能力ではなく、発展性のある基礎的学力がどの程度に達しているかを、科学的な視点から考査する必要に迫られている。

### 3. CEFR の基準と学内統一試験の基準

そもそもCEFRという基準は2001年に欧州評議会により発表されたもので、多言語・多文化が共存するヨーロッパにおける言語政策を推進する過程で生まれたものである。以後20年以上が経過した今日、CEFRは外国語としてのポルトガル語教育のプログラムやカリキュラムの立案、その教材作成、ならびに言語能力評価という目的のための参照資料となっている。

周知の通り、A1レベルは言語使用の基礎レベルとされており、この水準の学習者は、聞き手の助けを借りながら、定型文およびきわめて頻繁に用いられる語彙や表現を使って日常的な場面で交流する能力を有するものとされている。

いっぽうで、A2 レベルでは社会関係を示す基準がみられる。このレベルにおいて学習者は日常の簡単な状況を自分で処理する能力が必要とされる。われわれの統一試験においてもこの観点からA2レベルの言語能力を考査する問題が用いられる。たとえば以下ようなものである。

例1： A1 — Nível básico do uso da língua.

問題 下線部に入る正しい語を選びなさい。

1. Ele gosta \_\_\_\_\_ cinema brasileiro.

① por ② em ③ de ④ ao

2. Tu tens \_\_\_\_\_ lavar as mãos.

① por ② em ③ de ④ ao



例2： A2 — Competência pragmática para lidar com situações simples do quotidiano.

問題 日本語訳を参照して括弧内の語を並び変え、不要になる語を1語選びなさい。

1. O ladrão levou 【(a) que (b) o (c) todo (d) tudo (e) estava】 na casa. 泥棒は家にあるもの全てを持ち去った.

2. A senhora 【(a) a (b) perguntou (c) ele (d) quem (e) onde】 as horas é a nossa professora. 彼が時間を尋ねた女性は私たちの先生です.

さらにB1レベルの問題については、以下に引用するCAPLEのB1レベルの問題とほぼ同様な読解の問題を統一試験で用いる<sup>5</sup>。

例3： CAPLEのB1レベルの問題

CAPLE – Centro de Avaliação de Português Língua Estrangeira

DEPLE – Compreensão da Leitura

Questões 1-5

Depois de ler o texto, assinale com um V (verdadeiro) ou um F (falso) as afirmações 1-5. Escreva as respostas na folha de respostas.

Sou aluno do curso de Educação Física e Desporto e como futuro professor de Educação Física fiquei alarmado com a opinião da jovem de 13 anos, Catarina Barata, na edição de 17 de Janeiro. Pelo que percebi, esta jovem tinha problemas com a professora e não se deve condenar uma disciplina por causa de uma professora incompetente. Aliás, existem na escola os directores de turma para resolverem este tipo de questões. Todos os alunos têm direito às aulas de Educação Física e a professores de Educação Física competentes. A Educação Física é uma questão de cultura. Os conhecimentos que se adquirem nas aulas desta disciplina não se aprendem em nenhuma outra, e não estou a falar de "jogar à bola" ou "dar cambalhotas", pois só pensam assim as pessoas pouco esclarecidas! As aulas de

---

5. <https://pt.scribd.com/document/234883568/Modelo-Exame-DEPLE#>より取得. 2023/08/22.

Educação Física podem dar grandes contributos não só a nível das competências motoras necessárias para o dia-a-dia, como também a nível psicológico, por exemplo, a alunos com insucesso escolar. Se tivessem aumentado a carga horária da disciplina de Educação Física há alguns anos atrás, provavelmente muitas pessoas não teriam os problemas de concentração e coordenação que têm e não existiriam tantos acidentes

1. O aluno de Educação Física ficou muito agradado com a opinião da jovem.
2. O aluno diz que não se pode condenar uma disciplina só porque os alunos acham que o professor é incompetente.
3. A Educação Física, na opinião do aluno, valoriza o desenvolvimento global dos alunos.
4. A carga horária de Educação Física foi aumentada há alguns anos atrás.
5. O aluno responsabiliza o grande número de acidentes rodoviários pelo aumento da carga horária da disciplina de Educação Física.

CEFRの原則によれば、学習者は私的・公的、学校、職場での人間関係などさまざまな環境の異なる文脈において他の話者との相互関係を維持するだけの言語能力を求められるとされる。

例として CAPLE で掲示されている上記の問題は、模範的問題の一つとして示されていると考えてよかろう。しかし外国語としてポルトガル語を学習している者にとって、とりわけ日本の学校制度で育ってきた者にとっては、テキストで取り上げられているポルトガルの学校制度の中で起こりうる問題については、想像を超えた部分があることも事実ではなかろうか。

おそらくヨーロッパ全体では同様の制度なのかもしれないが、初等教育以来日本の体育教育に慣れ親しんだ日本人にとっては想像の困難な問題が提起されている。特に、恐らく何かの投書からの引用という体裁で問題文が書かれていると考えられるが、虚構とは言え実名をあげて個人がこの種の問題を論じている文章が公にされていることが違和感を与えている。総じて我々の身近なところではフィクションといえども個人情報保護をかたちで扱われるはずの話題が試験問題の文章として取り上げられることに大きな違和感があろう。さらに本文

中の *acidentes* という語も曖昧に映る。解答の選択肢を読めば「交通事故」のみを示していることが察せられるであろうが、学校内の事故、とりわけ体育授業の事故がしばしば話題になる昨今の日本の状況からすれば、学校内部の事故を除外する見解自体が日本の学校事情に馴染まず、判断に苦しむ。さらに最終的な解答は「V:正」「F:誤」の一文字を書くだけということになれば、内容は十分に理解せずとも解答は可能であり、客観式問題の常として、出題者の意図が十分に反映するかどうか疑問が残る。

また、1999年以来、本学で実施してきたCAPLEにおいては、時に、DEPLEの読解問題で問題と解答用紙が正しく一致しない、解答用紙に解答欄がないなどの不備が見られることもあった。

以上、実例から明らかなように、日本人学習者のポルトガル語能力の考查を目的とする以上、京都外国語大学の統一試験では受験者の言語外的な知識に依拠するような内容を含まぬ配慮が求められる。こうした諸問題を踏まえれば、問題作成者が一般的に語学力の考查に集約した内容の問題を作成する必要があることもおのずから明らかであろう。

文章の読解力考查については、京都外国語大学統一試験で用いられる読解問題には、受験者が4年次生も含まれるという実情に鑑み、難易度がやや高め、CAPLEのB1レベルに相当するレベルの問題を出題しており、以下のようなものがある<sup>6</sup>。

#### 例4：読解問題（CAPLEのB1レベル）

問題 Leia o seguinte texto português e responda à Questão:

Continua, por vezes, a pensar-se que a disciplina de Educação Física é um tempo perdido na formação de crianças e jovens. No entanto, basta observar um recreio numa escola para ver que as crianças correm, atiram a bola e atropelam-se sob o olhar atento e tolerante dos vigilantes. Seguramente na aula irão estar suadas, mas mais atentas. A atividade física é uma forma de

---

6. この問題例は、実際に用いられたものではない。問題の形式、内容、レベルを示すための例である。

preservar a saúde e de ajudar inclusive crianças e jovens com incapacidades físicas ou cognitivas. Ao integrá-las, estamos a criar um círculo de amigos que os irão ajudar a integrar-se na sociedade, uma sociedade para todos e, como tal, mais rica.

A disciplina de Educação Física é muito importante para o bem estar físico e psicológico e, por isso, os professores têm um papel importante na motivação dos seus alunos que estão numa fase de pleno desenvolvimento. Esta disciplina permite também a realização de diversos desportos coletivos que estimulam o trabalho em equipa e a interação com os outros.

Questão:

Leia as afirmações em japonês 1 a 6 e marque no espaço de respostas o V, quando o seu conteúdo corresponde ao teor do texto, e o F, quando a afirmação não corresponde ao conteúdo do texto.

1. 子供や若者が体育という教科は時間の無駄と考えることもあるが、体育は見学だけでも意味がある。
2. しっかりとした見守りのもとで、子供達がボール遊びをすれば体を鍛え、運動神経を養い不慮の事故防止にもよい。
3. 体を動かすことは、健康を維持するためになり、心身に問題のある子供や若者の健康維持に役立つ。
4. スポーツを通じて人々は友情を育み、心身に問題のある子供や若者の社会への融和を促し、社会はいつそう豊かになる。
5. 体育という教科は発達過程にある青少年の心身の健康のためにきわめて重要であるから、体育教師にとっては生徒のやる気を高めることが重要だ。
6. 体育教育で個人競技ばかりに集中しても、チームでの作業や他人との相互関係を高めるのにそれほど有益ではない。

Respostas: (実際にはマークシート解答用紙上で回答させる)

1. 【 】 2. 【 】 3. 【 】 4. 【 】 5. 【 】 6. 【 】

#### 4. 統一試験の内容

このようにCEFRの基準をはじめ、それをもとにした本学のベンチマークも実際の学力の内容について、今後学科を主体にその内容をより具体的にしていく必要がある。現在のところ学力としての詳細な

内容は、たとえば義務教育の英語教育における学習要領のようにははっきりと定められてはいない。文法、語彙、と言ったような、昔から言われている「基礎的学力」について、初めて学習する外国語とはいえ、短期間で学力をつけねばならぬ点が、義務教育における英語教育とは異なる。言語の四技能を平均的に涵養していく必要は当然であろうが、いっぽうで正しく読み書きができるということが、e-mail などの手段が発達するにつれて一層重要になっていることは疑いない事実である。我々の目的は1年程度の学習歴がある初習の学習者がおよそ8割の正答率を得られるような内容の試験を作成することである。こうした目的に沿って試験に含めることができるいわゆる「文法事項」を考えねばならない。文法事項に関しては、直説法・接続法という法によって達成度を分けることがしばしば考えられる。動詞の時称形式を中心に考えるのが試験の範囲を区切るのに都合がよいと思われる。さらにモダリティ、アスペクトの理解、というような目標をたてておけば、助動詞とその時称の関係も問題作成上、指針になりうる。しかし言語のコミュニケーション機能を踏まえるとこうした単純な分割方式は当然検討の対象となる。

こうした広範囲の文法的指標を習得目標として具体的に設定して行くことが求められていくことは間違いないが、合理的な範囲設定には困難がつきまとう。

その意味では範囲を考えやすい習得目標としては、すでに研究の進んだ頻度別の語彙研究の成果を利用した「語彙力強化」は目標として示しやすいと言えよう。なぜなら試験問題の質、レベルを考えるために、語彙の範囲を決めておくことがやはり必要だからである。頻度順の語彙表となると、(1)リスボン大学言語学研究所で編成された語彙表 LMCPC (Léxico Multifuncional Computorizado do Português Contemporâneo) が目安になるだろう。もうひとつは (2) Português Fundamental (2,200語ほど) である。ちなみに LMCPC を頻度順で 1,650 以上の語を集めるとほぼ 1,000 語になる。この中に含まれる動詞は例えば (頻度  $\geq 1650$ ) 234語となり、並べてみると、どれをとっても確かに基礎的という意味で納得のいくものである。しかし200以上の動詞について、それぞれの細かい *regência* を修得することを想定すると、1年間の学習で身につけるには案外ハードルが高いと言える。問題作成の立場からすると、それぞれの動詞の細部にわたって P E

(Português Europeu)、PB (Português Brasileiro) の用法をつぶさに記述した結果に準拠して問題を作成するのが手っ取り早く、さらに根拠も明確でよい<sup>7</sup>。問題作成には、とくに PE、PBの差異を中和すべく注意が必要な場合、語彙のサイズはひとつの重要な指針となろう。学生に語彙力の急速な強化を1年間で期待することには無理もあろうし、また英語からの類推などもあまり働かない場合が多い。実際の達成度を考慮すれば、1学年の学習を条件にすると学識語などはもちろんのこと、実際用いることのできる語彙サイズは相当に限られた範囲であることを認識して、教員側は問題作成に臨まざるを得ないのが実状である。

さらに文語・口語の差に関しても問題作成上は考慮しておく必要がある。語彙のサイズについて考えるとき口語のポルトガル語コーパスである Português Fundamental を忘れてはならない。これは全部で2,200語ほどの基礎語彙であるが、たとえば動詞が387を占める。さらに頻度順に並べて口語と文語を比較してみると、文語コーパスの(LMCPC)と口語コーパス(PF)とは、語によってその重要度が大きく異なる場合があり、語積すなわち文構造によって異なる意味をどの程度まで問題に盛り込めるかは、さらに細かな基準を作成する必要があることを示唆している<sup>8</sup>。

## 5. 統一試験の実際

京都外大で実施している統一試験の例を一部紹介し、その問題点を考察したい。問題は全て選択式の客観式問題で行っており、解答はマークシートに記入する方法をとっている。これは受験者の数が100人を超えることもあり、およそセンター試験的な客観式問題で対処する方法が求められるからである。また当然のことながら、入学試験と同様、

---

7. Verbos fundamentais do português (2018).

8. たとえば、formar という動詞は、LMCPCでは上から数えて18番目だが、PFでは140番目に位置し、文語には頻繁に用いられるが口語ではそうではない。また crerはその反対に口語的な傾向が強く、PFでは96位と100語以内に入るが、LMCPCでは283番目で1,000語の語彙表から漏れるので、実際の問題作成上はこうした口語と文語との差異に関しても、初学者を対象とするだけに合理的な解決が求められることになる。

問題に誤植などがあってはならず、万全を期してやらねばならない責任の重い作業である。

こうした体制については2000年代の初めから、問題研究会と称して有志の教員が学科内で集まり、各学期に授業で用いた問題を俎上に載せ、互いに批判しあうという勉強会を続けてきた。したがって問題の質に対する考え方と作成方法については、統一的な意識があったことが幸いしている。授業内で行う試験は、複数の目で見直すと問題点が明らかになるので、こうした日常的な努力はあきらかに試験問題の作成には資するところがある。

### 5.1. 音声に関する問題

この種の問題は実際のところあまり多くの種類の問題はなく、毎回似通った問題になりがちである。カタカナ発音から脱するべく日常的に指導は受けていても、未知の言語の音をあらたに習得するのは思いの外困難な課題であることは間違いない。音声記号を用いた問題を出題することも無論可能であり、かつてそうした問題を出題したこともあった。

さらに会場で音声を実際に再生して聞かせることも容易であるから、工夫次第でさまざまな出題形式が考えられよう。音は習得すべきものが限られているため、作問は比較的容易で学習者の学力を判断できる。現在のところはバリエーションが限られているが、より多角的な問題形式を導入していくことが求められる。

以下、正書法上の綴りと実際の音素との関連を習得しているかどうかを評価するための問題例を示す。

#### 例5：正書法と音素の関係を問う問題

問題 下線部の発音と同じ音を含む語を選べ。

1. música

① acima      ② dia      ③ onze      ④ mágico

2. exame

① achar      ② casar      ③ expor      ④ xaile

音声を用いた聴解力の考査は作成が比較的簡単である。他方、発表能力については、CALL教室などを使用し多人数の発話を一気に録音すれば評価したいは極めて簡単である。さらに携帯端末がここまで一般化している現在、標準的に付属している録音機能を利用すれば、録音した音声を提出させるという方法も技術的には十分に可能であり、要点を絞った問題を用意すれば評価は容易である。以下典型的な問題例として、授業中にはすでに利用されている簡単な方法を例示する。

#### 例6：発音の問題

問題 以下の語句を読み上げ、指定するURLから音声ファイルを投稿せよ。各項目の最初に「いちばん、にばん…」と日本語で言うことからポルトガルを録音すること。

1. Os meus amigos estão ali na praia.
2. Já são 22 horas. Vamos apanhar o táxi.
3. O Carlos anda um pouco doente.

この種の問題は、投稿ページへのリンクを許可するタイミングなど、実施に関して若干の技術的工夫が必要ではあるが、十分に問題として成り立つ。

#### 5.2. 名詞と冠詞：性・数の一致：選択問題

冠詞と名詞の性・数一致についての基礎的な知識を問う問題である。記憶を問う問題でもあるが、ある程度踏み込んだ学習を前提とした内容となる。以下の例のように正書法上要求される点も踏まえた問題とするように作成者側の留意が必要となる場合も多い。

#### 例7：名詞の性に関する問題

問題 下線部に入るべき定冠詞あるいは不定冠詞の正しいものを選び。

1. \_\_\_ Cinema Ideal fica no centro da cidade.  
① O      ② Os      ③ A      ④ Uma



2. Temos de resolver \_\_\_ problema.

- ① um    ② uns    ③ uma    ④ umas

### 5.3. 名詞と形容詞：性・数の一致：選択問題

形容詞と名詞の性・数一致を主要なテーマとする問題例である。形容詞の位置、名詞の多義性も踏まえた内容である。名詞を限定する形容詞の役割とともに、名詞の意味についても性により異なる場合があるという理解が必要な問題を含めるような工夫が作成側に求められる。

#### 例8：名詞の性と多義性に関する問題

問題 下線部に入るべき形容詞の正しいものを選び。

1. cidades \_\_\_\_\_

- ① capital    ② velhos    ③ modernos    ④ principais

2. papéis \_\_\_\_\_

- ① finas    ② altas    ③ fáceis    ④ grossas

### 5.4. 形態的知識:動詞の活用形式と文構造：選択問題

動詞の活用形式について、基本的な運用能力と文構造に関する問題である。対応する日本語から、意味と時称などを正しく活用形に反映できるかどうかを問う。基礎的なポルトガル語運用能力と日本語の理解力も同時に問うオーソドックスな問題形式である。

#### 例9：動詞の形態に関する問題

問題 後続する日本語の意味を参考にして下線部に入るべき正しい動詞を選び。

1. Ele \_\_\_\_\_ professor numa universidade. 彼は大学の先生だった。

- ① fui    ② era    ③ permanece    ④ fiquei

2. O Rui já \_\_\_\_\_ em Macau. ルイはマカオに行ったことがある。

- ① estive    ② esteve    ③ fizeste    ④ fez

## 5.5. 聴解問題

聴解問題の1例として、ダイアログの問題を示す。音声で以下の問いを聞かせ、返答としてよいものを選ばせる。選択肢 1~4 も音声で与える。実際の試験の時には、受験者はメモを取ることは許されるが、基本的には質問、返答ともに文字では問題用紙には表記されない。ここではダイアログのみを例示したが、もう少し長めのモノログという形で相当の長さのテキストを聞かせて、それに関する質問を音声で行うという方法も行うことがある<sup>9</sup>。

例10：客観式聴解問題：内容の理解とコミュニケーション能力

問題 問いに対する返答として1-4のうちもっとも適当なものを選べ。

— Como é que tem passado?

1. Tenho passado dois anos.
2. Passei lá por acaso.
3. Fiz grande esforço.
4. Mais ou menos.

## 6. 解答用紙

解答用紙はマークシート方式を利用し、採点は自動で行う<sup>10</sup>。解答用紙のレイアウトは自由に行え、自動送りのスキャナーがあれば、正確な点数処理が短時間で行え、効率的である。今後記述問題を取り入れるとなると、解答用紙の形式から採点の方法まで相当の見直しが必要となる。全体の点数計算などについては別紙の筆記解答用紙を用意し、学籍番号・氏名は受験者が書き込み採点者が点数をマークシート

---

9. 最近では良質の人工音声があるので、主に Text to speech を利用してサウンドを生成し、インフォーマントチェックを経た録音音声を用いて聴解試験を行っている(2023年現在)。

10. 採点は市販の専用のソフトウェアで行う。

に記入するなどの工夫をすれば大きな支障なく可能と考えている。

学籍 番号	201	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
	UH00	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
I	1	a	b	c	d						
	2	a	b	c	d						
	3	a	b	c	d						
	4	a	b	c	d						
II	5	a	b	c	d						
	6	a	b	c	d						
	7	a	b	c	d						
	8	a	b	c	d						
	9	a	b	c	d						

## 7. 評価について

本学における統一試験の概ねの傾向を示すため、数年間遡って2019年度から2021年度実施の点数を平均的に表したサンプルを以下の図2に示す。統一試験の難易度については、A1~B1程度の問題が混在しているため、一年次終了時点での学生のレベルに見合った試験であれば、平均点は大体60点~70点程度におさまることになる。以前はある程度高得点の学生に対しては、認定証というようなものを学科名で発行していた。この種の形式的なものがある程度のインセンティブになる可能性もあると考えられ、また、学生には事務的に点数のみ通知されるだけよりもよいかもしれない。

図1 解答用紙（見本）

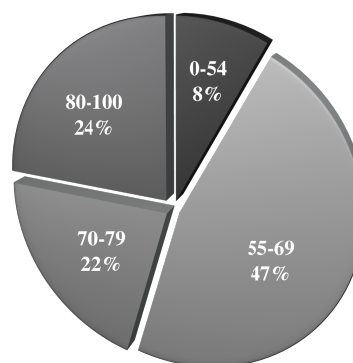


図2 統一試験得点の割合 (平均的結果)

こうした結果をわかりやすくpdfに出力して送る、あるいは紙で印刷して渡す、などの方法により、学生の手元に形として残る「認定証」といったものが多少の達成感につながるのではないかと考えられる。実際に希望する学生もいるので、実施については柔軟に考えるのがよいであろう。

## 8. 今後の展望

以上、京都外国語大学の統一試験について概略を紹介した。外国の基準で出題される資格試験は、当該国での生活を基準とした明確な目的があるだけに、どれも一言で言えば西欧的な常識とはやや縁遠い日本で生活する初学者には難しい面があることは否定できない。実際、国際的な資格試験で出題される問題については、西欧的視点で出題・評価される点が、日本の学習者にとって一種の壁となりうる。文化的なコンテキストに依拠した問題文の理解には言語外的な知識が求められ、日本の初学者にとっては難解となりうることは、本稿で実際の問題を通じて詳しく論じた通りである。

このような状況を踏まえると、CEFRの基準は大いに参考すべきとはいえ、より言語能力の考査に特化した、日本の学習事情に合わせた資格試験が今後求められることになるのではないか。特にポルトガル語の語彙の多義性を考査の対象とするには、日本語への翻訳に関わる問題を若干なりとも盛り込むことが効果的である。

なお、学科では必修事項、基準として求めるべき、最低限の履修内容を具体的に提示するため、様々な補助的な教材を提供して来ている。基礎単語1,000語のアプリ、動詞活用、接尾辞ドリルなどを開発して来たが、この10～15年間を振り返ると、日進月歩の技術の中で、電子的な手段をもちいると新しい技術に更新されて使えなくなるような極端な場合もあった。インターネット上での使用環境については、今日ではPCのみならず携帯端末上での動作を保証する必要もあり、今後の急速な技術変化に対応していくことは必ずしも容易ではないかもしれない。しかしながら、原材料たる音声データ等はそれ自体が無に帰することはないので、しかるべく保管し技術変化にそなえ、柔軟に対応していくことが必ずや可能と信じている。

参考までに、これまでに学科内で開発してきたアプリ等を簡単に紹介しておきたい。これらは特に重要度が高いものということで初年度より学生の教材として利用するので、間接的に統一試験の試験範囲という意味合いを持ってきていることも確かである。これらのアプリは以下の Landing Page よりリンクしている。

[https://cppq.org/portal\\_PA.html](https://cppq.org/portal_PA.html) あるいは  
<https://sites.google.com/view/canaldelb/ホーム?authuser=0&pli=1>

#### (1) 音声付き動詞活用フラッシュカード

[https://cppq.org/conj\\_verbos/entrada.html](https://cppq.org/conj_verbos/entrada.html)

動詞の活用を音声付き動画で学習する。PE、PB両方の動画が用意されている。主要な動詞が全部で10動詞ある。

#### (2) 音声付きポルトガル語基礎語彙1000語フラッシュカード

[https://cppq.org/flash\\_card/entrada.html](https://cppq.org/flash_card/entrada.html)

基礎語彙をLMCPCの頻度順に1,000語、PE、PB両方の発音で、英語と合わせて動画として収録・アニメーション付きなので、学習者は繰り返し視聴することで習得が可能となる。

ポルトガル語フラッシュカード (別バージョン) .

<https://sites.google.com/view/canaldelb/ホーム?authuser=0&pli=1>

#### (3) 二言語同時学習 接尾辞による語彙強化：20の基礎ルール (新版)

<https://cppq.org/suffix-html/index.html>

初版は2011に公開されたが、その後の技術変化に対応した新版で仕様を変更し、より直感的な学習を可能とした。周知の通り、いわゆる学識語の範疇になればなるほど、正書法上、英語とポルトガル語の語幹の共通性が高くなり、それによって接尾辞の対応を知れば、語彙強化はきわめて容易になっていく。無論他のロマンス系諸語も同様である。しかし、音声的に見ると同じ語幹の発音が言語により相当に異なるため、ロマンス系諸語が英語の発音に大きく干渉することも多い。これをあらためて見直すという意味も込めて、本学ではじまった二言語同時学習のなかで考案されたプログラムである。英語の接尾辞の知識を一気にポルトガル語に変換し、正しく英語の発音、ポルトガル語の発音を学ぶことが出来る。2言語同時学習プロジェクトにしたがって、英語を中心にポルトガル語、フランス語、イタリア語、スペイン語が対となっているが、スペイン語・英語の新版は技術的問題の解決を待っている状態である。

#### (4) ポルトガル語文法用語小辞典

<http://gelp.ciao.jp/GLOSSARIO/>

この小事典は学科として開発したものではないが、文法用語に関して、ポルトガル、ブラジルのnomenclaturaにしたがって訳語と解説を

施したものである。公開 (2013) 以来学会諸氏の参加を得て、充実してきている。

-----

上記諸アプリへリンクするLanding Page のQRCode.



## 参考文献

- 彌永 史郎 (2005) 『ポルトガル語発音ハンドブック』 大学書林.
- 彌永史郎 (2018) 『ポルトガル語動詞用法辞典 1~3巻』 西東舎.
- 彌永史郎, ペドロ・アイレス (2018) 『基礎ポルトガル語動詞 1~3巻』 西東舎.
- 彌永 史郎, 石川保茂, ペドロ・アイレス, 村松英理子 (2013) 「二言語同時学習; 接尾辞による語彙強化ドリル(英 — 仏・伊・葡・西) 開発」 『平成25年度、教育改革ICT戦略大会資料』 公益法人私立大学情報教育協会, p. 214-215.
- Trim, John et al. (2004) 『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 吉島茂 他訳・編 (2004) 朝日出版
- Cunha, Celso; Lindley Cintra (1986) *Nova Gramática Do Português Contemporâneo*. Sá da costa.
- Ferreira, Teresa S., et al. (2019) *Gramática Português Língua Não Materna Níveis A1 e A2*. Porto Editora.
- Ferreira, Teresa S., et al. (2019) *Gramática Português Língua Não Materna Níveis B1,B2 e C1*. Porto Editora.
- Camões, Instituto da Cooperação e da Língua, IP, *Programa de Português (professores) — Nível A1 — Ensino Português no Estrangeiro*, [https://www.instituto-camoes.pt/images/ProgramasEPE/Professores/Programa\\_EPE\\_A1.pdf](https://www.instituto-camoes.pt/images/ProgramasEPE/Professores/Programa_EPE_A1.pdf) (参照 2023-06-20).
- Camões, Instituto da Cooperação e da Língua, IP, *Programa de Português (professores) – Nível B1 – Ensino Português no Estrangeiro*, [https://www.instituto-camoes.pt/images/ProgramasEPE/Professores/Programa\\_EPE\\_B1.pdf](https://www.instituto-camoes.pt/images/ProgramasEPE/Professores/Programa_EPE_B1.pdf) (参照2023-06-20).

«Sumário»

**Exame unificado na Universidade de Estudos Estrangeiros de Quioto —  
Níveis de referência de CEFR e a avaliação**

Pedro Aires  
Shiro Iyanaga  
Toshimi Ueda

A Universidade de Estudos Estrangeiros de Quioto (UEEQ) realiza em todos os seus departamentos pelo menos uma vez por ano, desde 2015, um exame de avaliação denominado Exame Unificado (EU). A avaliação correta de que resultam as notas finais dos alunos, condicionando a sua formatura, constitui um dos assuntos de maior interesse na vida académica, tanto para os alunos como para os docentes. É necessário, por isso, uma consideração constante e rigorosa dos seus critérios para manter os níveis requisitados conforme os *sillabi* de cada disciplina.

O EU é obrigatório para todos os alunos no final do primeiro ano letivo e visa como meta, em princípio, os níveis A1 e A2 do CEFR. Por outro lado, o EU pode ser também realizado por todos os estudantes até ao quarto ano, necessitando assim de algumas questões com dificuldade mais elevada. Nesse sentido, o EU também contém questionários do nível B1, especialmente na parte de leitura e compreensão oral. Retrata-se também a situação atual do EU, propondo-se simultaneamente a criação e remodelação das metas de estudo para corresponder melhor à situação do ensino do português como língua estrangeira.



書評

金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』  
—虚構のことばに対する違和感を取り除き  
日本語の多様性を見つめ直す—

岐部 雅之

本書（現代文庫版、2023年刊行）のあとがきによると、役割語の概念は2000年11月の著者論文で公開されたあと、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（単行本）が2003年1月に刊行されている。それから20年余りの間に日本語と英語の関係を中心に翻訳の役割語に関する研究は発展し続け、近年では日本語とポルトガル語を対象とする同分野の論文も発表されるようになった（デナザレ「日本語からブラジル・ポルトガル語への翻訳における『役割語』翻訳の手法：『田舎ことば』を例として」2024年、など）。評者は大学の授業において日本文学のポルトガル語版を講読テキストに指定し、それを訳し戻す取り組み（「逆翻訳」と呼ぶ）を行っており、その課題の一つがほかならぬ役割語の扱いである。役割語というのは「特定のキャラクターと結びついた、特徴ある言葉づかい」（iv頁、現代文庫版からの引用については頁数のみ）を指し、さらに詳しく以下のように定義されている。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを『役割語』と呼ぶ。（203頁）

この役割語を多少なりとも意識せざるを得ないのは、小説を読んだり映画を観たりなど、主にフィクションの世界を味わうときではないかと思われるが、そこに翻訳という要素が絡んでくことで役割語はいよいよ避けて通れなくなる。つまり、いかにも老人が話すようなことば遣い、いかにも女性が話すようなことば遣い、いかにも外国人が話すようなことば遣いなどを文章化する際には何らかの

工夫が施されるに違いないからである（翻訳の場合であれば、起点言語の表現が目標言語へ反映されないときもあるだろう）。有名な外国文学作品ともなれば複数の日本語訳が存在することも珍しくはなく、同一の作品でありながら翻訳を通じて幾通りも楽しむことができるのは役割語の存在が一役買っていると考えられる。

それにもかかわらず、逆翻訳を取り入れた訳読の授業において、履修生から提出される日本語訳には役割語の形跡があまり見られない。曰く、現実の老人はそのような話し方をしない、現実の女性はそのような話し方をしない、現実の外国人はそのような話し方をしないからで、結果として登場人物の特徴を平板化させてしまっている。さらに、「言語上のステレオタイプ」（35頁）である役割語は偏見や差別に結びつきがちであるため、履修生が嫌っている面もあるだろう。とはいえ、逆翻訳の授業で日本語訳と日本語原文を比較した際に真っ先に気づくのが役割語の存在なのである。

ここで、小川洋子『博士の愛した数式』のポルトガル語版の一節と原文を比較してみよう。

— De todo modo, entre, por favor! Eu não posso lhe dar atenção pois estou ocupado, mas esteja à vontade para fazer o que quiser. (*A fórmula preferida do Professor*, p.18)

「まあとにかく上がってくれたまえ。僕は仕事があるからお構いできないが、君は君で自由にやってくれたらいい」  
（『博士の愛した数式』新潮文庫、17頁）

ポルトガル語版には感嘆符があり、博士が威勢よく話しているように感じられる一方、原文にはそれがない上に、「～たまえ」という特徴的なことば遣いも見られる。2020年代の価値観からすると偉そうなことば遣いと印象を受けるが（小説の時代設定は1992年）、一人称代名詞が「僕」であるため、日本語原文から感じられる博士の人柄は穏やかなものに響く。仮にこのポルトガル語の文について役割語を意識せずに翻訳すると、「いずれにしても入ってください！ 私は忙しいのであなたに注意を向けられませんが、どうぞ好きなように」とでもなるだろうか。正答が用意されている和訳のような課題であれば減点対象はないものの、文芸翻訳としては首を傾げざるを得ない訳文になっている。やはり、物語全体の世界

観を把握し、それぞれの登場人物の個性、すなわちキャラクターを浮かび上がらせるひと手間が求められる。実際、「日本語の役割語にとって特に重要な指標は、**人称代名詞**またはそれに代わる表現、および**文末表現**である」（203頁、太字ママ）とも指摘されており、逆翻訳を通じて日本語原文と照らし合わせることで役割語の重要性、ひいては日本語の多様性が再認識されるのである。

いくぶん手前味噌になることを承知で言えば、逆翻訳の授業には手ごたえを感じている。外国語を含む言語（ことば）に関心を寄せる履修生らが、「はじめは意味が理解できれば事足りると思っていたけれど、原文の雰囲気壊さないよう適当な日本語を考えるのが楽しかった」と授業アンケートのコメントに残すからである。母語の日本語で読める作品をわざわざ外国語版を使って訳し直すことに懐疑的だった履修生でも、日本文化独特のものや慣用句をはじめとする日本語らしい表現が外国語でどのように表現されているのか気になり、訳文を工夫するようになる。

そこで以下では、役割語を原書講読（訳読）の授業に積極的に取り込むことで、翻訳が「縦のものを横に置き換える」機械のような単調な作業ではなく、履修生の数だけ固有の訳文ができ上がる創造的な作業であることを見ていきたい。

さて、前置きが長くなったが、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波現代文庫）は冒頭の「役割語の世界への招待状」に続いて、次の全6章で構成されている。

- 第1章 博士は〈博士語〉をしゃべるか
- 第2章 ステレオタイプと役割語
- 第3章 〈標準語〉と非〈標準語〉
- 第4章 ルーツは〈武家ことば〉一男のことば
- 第5章 お嬢様はどこにいる一女のことば
- 第6章 異人たちへのまなざし

本書には「目から鱗が落ちる」ポイントがいくつもあるが、その中でも特にボロボロ鱗の落ちるのが日本語の全体像を把握する上で欠かせない現実の日本語とヴァーチャル日本語（役割語）との距離だろう。このうち、現実の日本語を扱うのが位相・位相差研究である。両者には重なり合う部分もある一方で、一般の日本語話者が有する知識の有無が決定的に異なる。要するに、現実の日本語に見ら

れる特有な様相（社会的な立場の違い、表現様式の違いなど）は「研究者がフィールド・ワークや文献の調査等の手続きを経ることによってようやく明らかになる」（37頁）が、役割語は幼少期から絵本をはじめ、漫画やアニメなどを通して蓄積された「現実に対して持っている観念」（37頁）なのである。そうすると、翻訳において登場人物の特徴を平板化させる役割語の不在について前述した際、現実を反映した日本語ではないから訳文に反映させる必要もないとした理由は正当性を失う。なぜなら、「日本語のヴァリエーションの総体を捉えるためには、『現実』すなわち位相・位相差の観点から見ていくだけでは不十分で、役割語の観点を加えることが極めて重要」（39頁）だからであり、このように見れば、翻訳においても現実の日本語とヴァーチャル日本語（役割語）の両面に配慮しなければならないだろう。ただし、役割語とはあくまで文化的なステレオタイプであるため、ネガティブな意味合いを帯びることがある点には配慮しなければならない。

では、なぜ一般の日本語話者は役割語の知識を持っているのだろうか。本書冒頭の「役割語の世界への招待状」のはじめに、「そうですね、わたくしが存じておりますわ」や「そや、わてが知っとるでえ」といった文を誰がしゃべっているのか選択肢から選ぶテストがあるが、日本で生まれ育った日本語の母語話者である評者にとっては迷うことなく正答を結びつけられるし、同じような条件の読者もそうに違いない（前者は「お嬢様」で、後者は「関西人」だろう）。現実にこのような話し方をする人がほとんどいないにもかかわらず、である。役割語の知識をいつの間にか身につけているのは、先にも触れた幼少期からの蓄積によるところが大きいですが、それだけではない。「大人になって次の世代の新しい作品の作り手となり、再び同じような役割語を作品に用いる」（27-28頁）ため、現実社会とは切り離されて再生産されるのである。なお、大人になってもこの文化的ステレオタイプが消えないのは、「サブタイプ化」（40頁）と呼ばれる心の中の情報処理による。つまり、自分の中にステレオタイプが一度でき上がってしまうと、それに合わない対象に出くわしても単なる例外に過ぎないと見なしてサブタイプ化し、ステレオタイプ自体は揺らがないのである。言われてみれば確かにそのとおりで、だからこそ「そうですね、わたくしが存じておりますわ」という文はお嬢様の発言だと自信を持って言えるのである

り、もし「そうですね、わたしが知っていますよ」と話すお嬢様が出てきたら、キャラクター性の弱いお嬢様として処理されるか、それ以前の問題として、お嬢様ではない何か別のキャラクターだと勘違いされるかもしれない。

このお嬢様ことばと関連して、翻訳をする際に頭を悩ませる「ことばの性差（女ことば、男ことば）」にも注目したい。翻訳関係のエッセイを読んでいると「てよだわ言葉」に象徴される女ことばは使いたくないが、発話者が誰かを明示したいときには使ってしまうといったもどかしさに出くわすことがある。それは社会における男女の役割の差が縮小してきている現代にあって、ことばの差異を強調することに少なからぬ抵抗を覚えるからであろう。たとえば、小川洋子『密やかな結晶』のポルトガル語版の一節と原文を比較してみる。

“Isto aqui é um 'guizo'. Sacuda na palma da mão.”

(*A polícia da memória*, p.11)

「これは“鈴”。手の上で転がしてごらん」

(『密やかな結晶』新潮文庫、9頁)

E daí a carta era enviada para onde quiséssemos. Muito, muito antigamente, era assim que acontecia.

(*A polícia da memória*, p.11)

そうすれば、どこへでも配達してくれたの。そんな時が、遠い昔にはあったんだよ。

(『密やかな結晶』新潮文庫、9頁)

これは母親が幼少期の「わたし」に語っている場面である。ことばの性差が文末表現に現れていることは一目瞭然で、“一定の基準”があるからこそ読者は発話者の人物像を想像できる。その基準は「非常に重要な概念である」（62頁）役割語としての〈標準語〉であるが、「現実の社会に現象として現れる言語としてではなく、われわれの観念・知識として捉える」（63頁）という点を忘れてはならない。つまり、関西弁の「あかん」に対応する標準語の「だめ」といった例ではなく、上記の引用文に絡めて言えば「手の上で転がしてみて」や「どこへでも配達してくれました」など役割

語の度合いが薄いものになろう。したがって、観念・知識としての〈標準語〉からすれば、「～ごらん」「～の」「～よ」は女性専用表現と言える（金水が疑念を抱いているように「普通体に『よ』が付く」ものはイントネーションを下降調にすれば男性的にも響き、中立的と判断できなくもない）。いずれにしても、文化的ステレオタイプは人間の観念・知識の中に強固に根を張っているため、ことばの性差は変化しつつも存在し続けると思われる。こうした状況に違和感が拭えないとしても、「社会に〈男性語〉〈女性語〉の知識が共有されている以上、作家たちはその知識に安易に寄りかかりがちになる。その結果、さらに人々の役割語の知識が強化され、子供たちへの新たな刷り込みが重ねられていく」（171頁）のだから。ことばの差異がどれほど曖昧になろうとも、「小説の中の会話は、**小説用に再構成された虚構のことば**である」（32頁、太字ママ）ことを踏まえれば、「私たちの役割語の知識は、現実のありさま以上に、私たちに言葉の男女差を増幅させて見せている」（171頁）と言われても至極納得がいく。

原書講読の授業で原文の意味が理解できれば十分と考える者からしてみれば、翻訳（訳読）という作業は非効率的で時代遅れでしかない。ましてや翻訳機や生成AIが日々発達している時代に、である。ただ、母語にしても外国語にしても、翻訳（ある言語から別の言語へ行ったり来たり）を通じて徹底的に文章を読み込みながらいろいろな解釈の可能性を検討することで、ふだんは意識せずにいることや理解したつもりでいたことに注意を促してくれる貴重な機会となろう。それがヴァーチャル日本語、つまり役割語の存在である。「役割語なくして、日本語の作品は成り立たない」（200頁）とまで言う本書は、ことばに関するあらゆる学習にとって必携の教科書ではないだろうか。

書評

*Manual of Brazilian Portuguese Linguistics*,  
edited by Johannes Kabatek and Albert Wall,  
2022, Berlin: De Gruyter.

黒澤 直俊

このシリーズはロマンス語関係のマニュアルを出版していて、ポルトガル語にはすでに *Manual de linguística portuguesa* が、Ana Maria Martins と Ernestilha Carrilho の編集で 2016 年に出版されている。アフリカやアジアでのポルトガル語の言語接触や社会言語学など一定の広がり認められるが、主な対象はポルトガルのポルトガル語であった。もちろん、企画段階ですでにブラジルポルトガル語版が予定されていたわけだから当然の方向性である。この 2022 年のマニュアルは英語で書かれ、読者層を広く設定している。教室での経験からわかるようにポルトガルとブラジルで言葉は大きく異なる。発音から目的語代名詞の位置、単語の用法上の違いは文法書でも言及されている。ポルトガルのテレビを見ているとブラジルから訪問している芸能人のインタビューが放映されることがあり、質問の意味が理解されていないのが明らかな場面もある。コミュニケーションギャップの一種だが、あるブラジルの歴史言語学者は語用論やコミュニケーションストラテジーが違っていると示唆していた。

ブラジルポルトガル語に関する文法研究は近年かなり精密化していて、目的語代名詞についても、母語話者の一部には社会方言の違いで代名詞が一部欠落していることや、方言では話し言葉から接続法が消えているものがあること、さらに多くの話し手にとって接続法は第二言語習得の問題として扱われるべきと主張しているブラジルの生成文法研究者すら存在する。教科書の例文や教室での授業との関係で例を挙げれば、ポルトガルのポルトガル語は言語学でいう典型的な **pro-drop** 言語で、これは **pro = pronome**、つまり主語の代名詞を省略するのが普通という意味である。ロマンス語にはフランス語のように主語が接語化して省略できない言語もある。**pro-drop** 言語の授業の一番最初の説明は「動詞の語尾で主語は示されるので、主語代名詞は強調や対比などを除き省略される」であるが、これは実はブラジルのポルトガル語には当てはまらない。ブラジルポルトガル語では「主語代名詞は省略出来るが、省略しないことが多い」

と教えなければならない。もちろん、話し言葉や書き言葉、文体、スタイルなどで異なる。一人称単数では動詞の語尾は一義的だから主語はわかるはずだが、ブラジルポルトガル語の話し言葉で *eu* は省略しないのが普通である。この問題を最初に扱った研究はおそらく 1993 年に出版された Ian Roberts と Mary A. Kato 編の *Português brasileiro, uma viagem diacrônica* の中の Maria Eugênia Lamoglia Duarte による *Do pronome nulo ao pronome pleno: a trajetória do sujeito no português do Brasil* ではないかと思う。論文は 1845 年から 1992 年までリオ・デ・ジャネイロで上演された芝居の台本をピックアップして調査し、主語を省略しなくなる傾向を示したものだが、興味深いことに 1 人称ではこの傾向は明らかなのに、3 人称では *pro-drop* 的傾向が依然として強く、矛盾する様相を呈している。この書には続編があり、2019 年に *Português brasileiro, uma segunda viagem diacrônica* として最初の 2 人の編者に Charlotte Galves を加えた 3 人で刊行されている。同じ著者による *O sujeito nulo referencial no português brasileiro e no português europeu* のタイトルで 93 年の論文が検証され、ポルトガルのポルトガル語との比較などが行われている。

さて、書評の直接の対象ではないものについて長々と述べてきたのは、この二つの *viagem diacrônica* は、ブラジルのポルトガル語がポルトガルのポルトガル語とは異なった方向へ変化していると明示的に主張した記念碑的著作であったからである。しかし、これらの二書は最先端の理論言語学に基づいて記述されているので難解であるという欠点がある。生成言語学の理論に通じていないと理解はほとんど不可能に近い。その意味で、特定の理論を前提としない解説的なマニュアルの出版は長く待たれていた。

本書は、18 頁ほどの導入の章に加え、全体が 20 章で構成され、600 頁強のつくりである。0 章はブラジルポルトガル語研究の現状というタイトルで近年のコーパス構築の状況や中心的な研究テーマなどが紹介されている。コーパスに関する情報がまとめて提示されているのは貴重である。続く 20 の章の基本的構成は、歴史的経緯に基づいた言語史の概要や社会の歴史、そして背景としてブラジルでの言語接触の歴史が説明され、さらに音声、形態、統語、語彙という言語構造の核心について 16 世紀以降の変化が解説されている。これらについては別途、共時的な観点からの章が立てられ十分な説明がある。これらを通じてポルトガル語の教師が教室で感じたり、



ブラジルとポルトガルの言葉の違いに起因する問題のほとんどが説明されていると言える。章立ては以下である。

0. Introduction: the state of the art in Brazilian Portuguese linguistics
1. Brazilian Portuguese linguistics: an overview
2. The social history of Brazilian Portuguese
3. The history of linguistic contact underlying Brazilian Portuguese
4. Historical phonetics and phonology
5. Historical morphology
6. Historical syntax
7. The history of the lexicon
8. The debate on Brazilian and European Portuguese
9. Dialectology and linguistic geography
10. Sociolinguistics
11. Brazilian Portuguese: contemporary language contacts
12. Sound-related aspects of Brazilian Portuguese
13. Morphology
14. Syntax
15. Lexicon
16. On the history of semantic studies in Brazil
17. Spoken vs. written language
18. Onomastics and toponomastics
19. Linguistic policy and the orthographic agreement
20. Psycholinguistic studies: language acquisition and processing

ブラジルのポルトガル語では従来から社会階層による違いが大きいことが指摘されてきた。社会言語学の章があるのはその意味で当然としても、地理的な言語研究は遅れていた。9章はこの問題を扱っているが、2014年にブラジル言語地図が刊行されたことを受け、北東部、南東部、南部の各地域に関連して刊行された言語地図の概況が与えられている。地図には社会的言語差を組み込んで地図化したのもあり興味深い。地理的な言語差を地図上に投影する分野は従来は言語地理学 *linguistic geography* と呼ばれていたが、最近では *geolinguistics* と呼ぶ。地理言語学または空間言語学とでも訳すべきだろう。ブラジルの地域的言語差としては1950年代に Antenor Nascentes によって報告された、強勢前無強勢中高母音 e, o の発音が北部では広く [ɛ, ɔ]、南部では狭く [e, o] となることが知られていたが、考えてみ

るとあまりにも漠然としている。この章でバイアあたりでは標準的な *lua* に加えて *luma*, *lūma*, *lūa* も併存しているという記述があり、かなり衝撃的である。一般的には、母音間の *n* が先行母音を鼻音化し脱落するのは 11、12 世紀あたりとされ、16 世紀のテキストでも不定冠詞の女性形は *ũa* と表記されることが多く、*ũa* > *uma* の変化は、母音間の *n* の脱落からはかなり後である。ブラジルの植民開始は 1532 年であるが、古い言語状態が地理的に残ることは普通にあることで、ポルトガルでも 16 世紀前半の言語状態は北東部の山岳地帯に残っているし、その前の状態がスペイン側のポルトガル語の飛び地に 1950 年代まで残っていたことが記録されている。言語変化の要因として言語接触が重要な役割を果たすことは、最近よく指摘されるが、本書では 3 章が歴史的な言語接触を、11 章で現代の言語接触が扱われている。ここで言う言語接触とは基本的には移民によってもたらされた言語で、植民地時代には原住民であるインディオの諸言語の影響があったとしても、アフリカから奴隷として連れてこられた人々の言語や、独立後は欧州やアジアからの移民が継承語として維持する言語が主たる対象である。ブラジル南部のドイツ系の移民や、中南部でのイタリア系の移民の存在は知られているが、11 章はかなり踏み込んだ説明を与えている。話し手の数でポルトガル語に次いで多いのは、ドイツ語の方言の話し手で、南部の自治体には公用語に認めているのもあるという。ドイツ語で *Hunsrückisch* と *Pomersch* と呼ばれるものがそれで、前者はパラティネート地方とかプファルツと呼ばれるドイツ南西部の方言で、現在では衰退しているとされ、後者は今のポーランドの一部にかつて存在したドイツ語の方言で、欧州ではもう存在しないという。また、イタリア系の移民が集中するのはサンパウロ州で、隣接するパラナ州や南部の州がそれに続くが、ヴェネトの出身者が多く、ヴェネト方言などのイタリア語の方言は南部では *Talian* として公用語とする自治体もある。スラヴ系では 19 世紀末からウクライナやポーランドからの移民が多いが継承語として維持されているのはウクライナ語である。さらに、日系移民や中国、韓国などからの移民にも言及されているし、南北戦争後に合衆国の南部から移民があったことも言及されている。しかし、なかでも興味深いのは *Portuñol* と

通称される、ウルグアイやアルゼンチンとの国境地帯で観察されるポルトガル語とスペイン語の混合言語的使用である。10 頁近くがあげられているが、ウルグアイとアルゼンチンでは *Portuñol* の受け入れが異なることや、典型的な特徴などが説明され、さらに言語使用の実態が流動的であるとの指摘がある。アルゼンチンのミシオネス州の *Chuy* / (ブラジル側で) *Chui* やウルグアイの *Rivera* という都市は街自体が国境線の上に存在するという点で特異である。

また、マニュアルに人名学と地名学の章が立てられている。ロマンス語圏の地名研究は伝統的で地名によって過去の言語の痕跡を突き止めることが出来るからであるが、反面、民間語源のこじつけも多く注意を要する分野である。ここでは、植民地時代と独立後に分けて地名の構成要素についてかなり踏み込んだ説明が行われている。人名についてはより簡潔である。言語政策に関する 19 章は、内容的にはブラジルの言語政策史と呼べるような内容で、独立後の言語意識に関する議論が詳しい。最後の章は心理言語学と題され、母語習得の問題にあてられている。章が前後するが、話し言葉と書き言葉と題された 17 章は内容的には文を超えた談話のレベルでの分析を扱ったもので、やや理論的かもしれない。ただし、理論を背景に問題を展開するときには、一定の説明が与えられているので、理解しやすいと思う。本書はまちががなくポルトガル語研究に関わる者にとって必読の書と言える。



書評

Jeferson Tenório, *O avesso da pele*,  
Companhia das Letras, 2020<sup>1</sup>

伊藤 秋仁

本書はジェフェルソン・テノリオの2020年の小説である。*O avesso da pele*（『肌の裏側』）のタイトルからもわかるように本書の主要なテーマは肌の色であり、本書は黒人である著者の体験がここに織り交ぜられたフィクションである。

ジェフェルソン・テノリオは1977年、リオデジャネイロ生まれ、1990年代初めにブラジル南部のポルトアレグレに移り住む。ポルトアレグレの私立大学に入学後、リオグランデ・ド・スル連邦大学に再入学。文学の学位を得る。同大学修士課程にてポルトガル語圏のアフリカ諸国の文学の研究で修士号を、リオグランデ・ド・スル教皇庁立大学で文学理論の博士号を取得している。およそ20年間、ポルトアレグレ市内の様々な公立学校で教師を務めた。2013年に *O beijo na parede*（『壁へのキス』未邦訳）でデビュー、2018年に *Estela sem Deus*（『神なきエステラ』未邦訳）、そして長編第3作の本書はブラジルの権威ある文学賞であるジャブチ賞（文学小説部門）を受賞した。リオグランデ・ド・スル教皇庁立大学のホームページ<sup>2</sup>によれば、現在は米国のブラウン大学の客員教授を務めている。

1. *abordagens*<sup>3</sup>

2020年5月25日、米国のミネアポリスで発生した、警察官が黒人男性を拘束するに際して、膝で首を押さえつけ、死に至らしめた事件は、大きな注目を浴びた。この事件をきっかけに、米国全土にブラック・ライブズ・マター運動が大きな盛り上がりを見せた。ブラジルにおける警察のアフリカ系ブラジル人に対する暴力の問題

---

<sup>1</sup> 本書は評者の翻訳により2024年度中に春風社より出版される予定である。

<sup>2</sup> 〈<https://online.pucrs.br/professores/jeferson-ten%C3%B3rio>〉 閲覧日2024年8月25日。

<sup>3</sup> *abordagem* は「尋問、警察によるアプローチ」の意。

は、はるかに大規模で切迫した状況であるはずなのに、おそらくはあまりに日常的であるがゆえに、アメリカのこの一連の動きを、どこか対岸の火事のごとく眺めているように思われた。これは評者の個人的な印象に過ぎないかもしれないが。

本書が出版されたのは同事件発生からまもなくのことであった（2020年8月）。本書の主人公が黒人であり、その主人公が警官に尋問を受ける最中に殺害されるという事件との類似性から、本書は刊行直後から話題を呼んだ。Companhia das Letras社というメジャーな出版社からの刊行でもあり、一部のメディアで大々的に取り上げられた。

テノリオ本人によれば、本書執筆のきっかけも警察による「尋問」であったという<sup>4</sup>。

著者の転機は1990年代初めにリオからポルトアレグレへの転居であった。周知のとおり、リオはアフリカ系住民が大半を占める。一方、ポルトアレグレでは白人が圧倒的マジョリティであり、マイノリティである黒人は否応なく目立つ存在となる。10代初めのテノリオは、ポルトアレグレに転居後、頻繁に警察の尋問を受けたり、容疑者扱いされたりした。40代半ば、社会人として経験を積んだ後、中流階級が居住する地区の自宅前で、おそらくは黒人であるというだけで、警察から尋問を受けた。素直に応じたけれども、ここで不穏な行動を取ればどうなるかという想像から本書のプロットを思いついたという。

## 2. ações afirmativas

本書は、父親であるエンリケが殺害された後、息子であるペドロが父である「あなた」と母親の人生を一人称で語る物語である。ペドロを含む3人の人生は交錯するが、それぞれの人生が時系列に沿うことなく、細切れに描かれ、構成されている。主役は、二人称で語られるエンリケである。エンリケの両親についての叙述は多くな

---

<sup>4</sup> <<https://www.wook.pt/wookacontece/novidades/noticia/ver/entrevista-com-jeferson-tenorio/?id=201245&langid=1>> 閲覧日 2024年8月25日。

とは言え、本書の構想や執筆は米国のジョージ・フロイドの事件以前に行われており、本書執筆と直接的な因果関係はない。

いが、エンリケが生まれてまもなく、実父は家族を捨てた。またエンリケには異父妹が二人いるけれども、妹たちの父親に関する記載はほとんどない。「父親の不在」はブラジルの貧困層における重大な問題であり、貧困の悪循環や青少年の非行の問題とも大きく関わっている。本書では貧困問題に焦点を当ててはいないが、父親の不在はエンリケとペドロの人生や二人の親子関係に大きな影響を及ぼしている。

テノリオも父親がおらず、**Prouni**（プロウニ）と呼ばれるブラジル政府の低所得家庭の学生に対し大学の学費の全額または一部の奨学金を支給するプログラムの援助を受け、ポルトアレグレにある私立大学の文学部に進学した（その後、リオグランデ・ド・スル連邦大学入学に改めて入学）。エンリケとペドロも、明記はされていないものの、同様に **Prouni** の恩恵を受けて大学に進学したものと思われる。エンリケとペドロのキャンパスライフからはアフターマティブアクション後の、アフリカ系を主とする貧困層のインテリ学生が直面するアイデンティティの揺らぎが窺われる。大学教育の中に人種が持ち込まれることで、大きなパラダイムの変動が起こりつつあり、その一端が描かれている<sup>5</sup>。

### 3. elementos afro-brasileiros

---

<sup>5</sup> 本書の文学的な意義や重要性は論を俟たないが、批判されることを承知で、あえて欠点を挙げるとすれば、内容の詰め込みすぎと書き込みの少なさである。アフターマティブアクションにより大学に入学したアフリカ系学生のアイデンティティの揺らぎや社会進出の困難さは、本書の通奏低音の一つであり、もっと丁寧に描くべきではないかと感じた。テノリオもその点について意識しているかどうかは不明であるが、機会を別に譲った可能性もある。テノリオのインタビュー記事によれば、次回作はクォータ制導入後の3人の黒人大学生についての物語になるという。

Luiz Felipe Cunha, “ENTREVISTA Jeferson Tenório: Uma entidade que fabrica as próprias armas” 28 de janeiro de 2022.

〈<https://www.bpp.pr.gov.br/Candido/Noticia/ENTREVISTA-Jeferson-Tenorio>〉 閲覧日 2024年8月25日。

2020年にはテノリオと同じくアフリカ系ブラジル人であるイタマール・ヴィエイラ・ジュニオールの『曲がった鋤』<sup>6</sup>がジャブチ賞（文学小説部門）を受賞、翌2021年にはテノリオの本作が続いた。2年続けてアフリカ系の作家が同賞を受賞したことで、大学と同様、白人が大半を占めてきたブラジル文学界に新たな潮流が生まれたことが示された。

両作品ともアフロブラジルの要素を基軸に物語は展開しているが、読後感はまったく異なる。『曲がった鋤』はいかにも文学的な作品だ。大きな構想の中で、アフリカ系ブラジル人が辿った歴史や苦難を物語に昇華させ、その余韻で読者にメッセージを伝える。一方でテノリオの作品は直接的だ。ストーリーは決して複雑ではない。描写も余韻を感じさせるというよりも、言葉を投げつけているようだ。評者が読み終えた時、最初に感じたのは同書の持つ「オフビート」ともいえるテイストであった。様々な要素がときに脈絡なく提示される。言葉の選び方も直截であり、文体や文章に凝ったところもない。おそらくはあえてそうしたのであろうが、作為なく即興的に見えるさまは、テノリオの好むブラジルのアフリカ系ヒップホップアーティストたちの詩作法を援用しているのかもしれない<sup>7</sup>。

---

<sup>6</sup> 邦訳は武田千香・江口佳子訳、水声社、2022年。「この作品が最初に刊行されたのはブラジルではなく、まずは2018年のポルトガルの文学コンクールのレヤ賞の受賞作品として2019年1月にポルトガルのレヤ社から出版され、ブラジルではその後、同年8月にトダヴィア社から刊行された。」武田千香「語りはじめたアフロブラジル作家たち—原点を見つめなおして—」『総合文化研究』第25号、東京外国語大学総合文化研究所、2021年、31頁。

<sup>7</sup> ”Fã de Racionais MC’s, Mano Brown, Criolo e Emicida, ele também foi rapper. “Ruan de Sousa Gabriel, “Jeferson Tenório: com o premiado ‘O avesso da pele’, que ganhou o mundo e vai virar filme, autor sobe ao primeiro escalão da literatura brasileira” O GLOBO CULTURA, 20 de janeiro de 2022.

<<https://oglobo.globo.com/cultura/livros/jeferson-tenorio-com-premiado-avesso-da-pele-que-ganhou-mundo-vai-virar-filme-autor->



本作には様々な黒人ミュージシャンの音楽が引用される。しかし、その音楽について詳しく語られることなく、ただ曲名や歌詞の一部が提示されるにすぎない。引用されるのはミルトン・ナシメントやルイス・メロディアといったメジャーどころから、ジャルズ・マカレやイタマル・アスンサンといったマイナーどころまで。冒頭と末尾のペドロが心情を吐露するシーンには、オグン、オリシヤ、オクタなどアフリカ系宗教の神や呪物が現れるが、それも詳しく語られることもない。

#### 4. discriminação racial

本書のクライマックスであるエンリケの死は、人種的な偏見を背景にした警察の理不尽な暴力によるものである。本書のタイトルはエンリケの口からペドロに伝えられる言葉の中に現れる。

「誰にも見えない裏側を守れ。遠からず肌の色が我々の体を貫き、世界での我々の在り方を決める。どれだけお前の人生に肌の色が介在しようが、お前の態度や生き方がその支配下に置かれようが、お前はどうかして保たなきゃいけない。そこに収まらない何かを。筋肉と臓器と血管の中にお前だけのただ一つの場所がある。そこにあるのが愛情だ。その愛情が我々を生かしてくれるんだ」<sup>8</sup>

自身の感情を抑えながら、人種差別が愛する息子にもいずれ及ぶことを伝え、人種差別に屈せずに生きることを鼓舞する言葉である。人種差別は本書にそこはかかない悲しみを伝えている。

本書には、黒人が置かれている様々な社会状況が、主人公の3人と彼らを取り囲む人々との関係を通じて描かれている。構造的な人種差別（労働市場での差別、教育の現場での差別）、人種差別的な言動（ユーモアと人種差別の微妙さ）、異人種間にある見えない

---

sobe-ao-primeiro-escalao-da-literatura-brasileira-25360784〉 閲覧日  
2024年8月25日。

<sup>8</sup> 拙訳による。Tenório, op. cit., p.61

壁、ネグリチュードに対する意識の濃淡、黒人が統一的に行動する困難さ（政治的マイノリティの代表性の阻害）、早熟な性、家庭内での暴力、黒人女性に対する差別（カラーリズム：同人種間でも肌の色の濃淡によって生ずる差別）など<sup>9</sup>。

これらの人種差別に関するエピソードは、エドワード・E・テルズの『ブラジルの人種的不平等』<sup>10</sup>で指摘された事例と多くの点で重なっており、作者もそれを基に作中で言及したと思われる。

##### 5. ensino público

テノリオは大学在学中から公立学校の教師を務めた。本書においても主人公エンリケの職業は公立学校の教師であり、公立学校は重要な物語の舞台となっている。ブラジルの公教育の資金不足や質の問題、教員の多忙な業務や待遇の悪さ——ゆえに掛け持ちが当たり前になっている——が、本書でもエンリケの体験として描かれ、しばしばうんざりした思いが吐露されている。一方で、青少年・成人対象の夜間クラスにおけるエンリケの描写は本書のもう一つのクライマックスである。貧困層が直面する暴力や薬物の問題が教室内で描かれる。生徒たちを「落ちこぼれ」と称しながら、彼らに対する教育の無益さを嘆きながらも、エンリケは犯罪者に身を落としかねない生徒たちを放置できずにいる。最後には愛読書であるドストエフスキーの『罪と罰』を語り演じることで生徒たちの関心を引き付けることに成功する<sup>11</sup>。

---

<sup>9</sup> 人種差別の分類については、下記のサイトを参考に、評者が加筆して作成した。

Mayumi Maciel, “O avesso da pele: questões raciais e afetos”, Instituto Aurora, 13 de dezembro de 2021. <<https://institutoaurora.org/o-avesso-da-pele/>> 閲覧日 2024年8月25日。

<sup>10</sup> 評者と富野幹雄南山大学名誉教授の共訳。明石書店、2011年。

<sup>11</sup> テノリオ自身も教室でストーリーテリングの授業を行っている。“Acabei me tornando um contador de histórias. Percebi muito rapidamente que contar histórias em sala de aula era uma questão de sobrevivência para você conseguir ser escutado pelos alunos.” Camila Prado, “Entrevista Jeferson Tenório: Da literatura em sala de aula à sala de aula na literatura”, *Escrevendo o futuro*, 1 de novembro de 2022.

テノリオ本人は、エンリケの造形を自身とは異なる存在であると述べている。エンリケは「非常に夢見がちで、ドン・キホーテ的な人物である」<sup>12</sup>と。テノリオはインタビューの中で、教職は「自分にできる唯一の仕事」<sup>13</sup>であると語っている。ポルトアレグレ出身の黒人の詩人で文学の教師でもあるジョルジ・フロエスが書物について語る姿を見て、「これこそが自分のやりたいことだ」<sup>14</sup>と思ったという。ジャブチ賞受賞後、教師を辞め専業作家となった今も教室が恋しいとしばしば発言している<sup>15</sup>。

## 6. censura

ブラジル社会は国論を二分する対立が生じている。ジャブチ賞受賞後、ブラジル社会の過度な変化を望まない人々から、本作はしばしば目に見える形で「反感」を示されるようになった。2022年3月には、バイア州サルヴァドルの私立の高校で講演が予定されていたが、中止しなければ殺害するという脅迫を受けた（結局オンラインで実施された）。2024年3月にはリオグランデ・ド・スル州の内陸部サンタクルス・ド・スル市の州立高校の校長が動画を投稿し、本書の批判を展開した。批判の矛先は人種差別や警察の暴力の描写ではなく、本書で描かれた性的表現だった。18歳未満の学生には不適切だとして、教育機関からの回収を訴えた。マツグロソ・ド・スル州、ゴイアス州、パラナ州の教育局が同調し、本書が教育機関から回収される騒ぎが起こった。一方、このような「検

---

〈<https://www.escrevendoofuturo.org.br/conteudo/revista-digital/artigo/124/entrevista-jeferson-tenorio>〉 閲覧日 2024年8月26日。

<sup>12</sup> Carolina Paz Comerlato, “Jeferson Tenório: ‘O que fica são essas histórias que ainda não foram contadas’”, *Journal da Universidade*, 22 de agosto de 2024.

〈<https://www.ufrgs.br/jornal/jeferson-tenorio-o-que-fica-sao-essas-historias-que-ainda-nao-foram-contadas/>〉 閲覧日 2024年8月26日。

<sup>13</sup> Prado, op. cit.

<sup>14</sup> ibid.

<sup>15</sup> テノリオはジャブチ賞受賞後、20年続けた教職を辞めた。最初の10年間は公立学校の、後半の10年は私立学校の教員を務めた。

関」に対する反発が各方面から生じた。出版社は「文脈から切り離し、歪曲された一部分の解釈に基づいて書物を回収する行為は、教育と民主主義の基本的な原則を冒涇するものであり、文化的議論を弱体化し、生徒たちから批判的・内省的思考力を養う能力を損なうものである」と反論した。インターネット上の署名運動では、シコ・ブアルケ、ドラウジオ・ヴァレーラ、レニーニ、ミア・コウトといった多数の文化人がいち早く声を上げている<sup>16</sup>。

テノリオのインタビューにおける発言や、博士号取得をはじめとするアカデミズムへの傾倒から察するに、執筆に際してイタマル・ヴィエイラ・ジュニオールのような従来の文学的なアプローチを採用することも可能であったはずだ。しかし敢えて露悪的とも言えるような表現を厭わず、シンプルな題材をシンプルな言葉で描いたのは、当然のことながら彼なりの計算や意図があつてのことと思われる。結果としてビビッドで心に突き刺さる傑作を生み出した。ラッパーでブラジルのアフリカ系ストリートカルチャーに親しんだ思春期とアフターマティブアクションの恩恵を受けて大学で学んだ青年期、教職と研究に打ち込む壮年期のそれぞれが彼の作品に多様な彩りを与えている。今後は黒人として、父親として、どのような作品を物していくのか。目を離すことができない。

---

<sup>16</sup> “Contra a Censura à Literatura de Jeferson Tenório”, change.org  
<<https://www.change.org/p/contra-a-censura-%C3%A0-literatura-de-jeferson-ten%C3%B3rio>> 閲覧日 2024 年 8 月 26 日。

書評

クラリッセ・リスペクトル『ソフィアの災難』  
福嶋伸洋/武田千香編訳（河出書房新社、2024）

現代に「生きる」クラリッセ・リスペクトルの文学

江口 佳子

### 1. 意識の内奥

クラリッセ・リスペクトル（Clarice Lispector, 1920-1977）の作品では、主人公の容姿は容易に想像できないのだが、その人物の感情、思考、行動は鮮明に読者の脳裏に残る。文学者ネリー・ノヴァイス・コエーリョは、リスペクトルのデビュー作の長編小説『野性の心の近くに』（*Perto do coração selvagem*, 1943）の主人公ジョアーナについて、次のように述べている。

実存的不安に囚われ、言葉で表せないものを表現するために、あるいはむしろ、日常的な関係の因習的な外見の下に隠された様々な感覚の混沌を、本来の直線的な言語という織物の中で整理するために、可能ないし不可能な言葉の力と執拗に格闘する女性像のギャラリーに登場する最初の女性である<sup>1</sup>。

コエーリョは、作家リスペクトルについて、単なる内省的な小説を書いたのではなく、自己意識の曖昧な場所を模索しようとする人物を生み出したと評価している<sup>2</sup>。

本書『ソフィアの災難』には、リスペクトルの初期から晩年までの短篇集全6冊の中から、訳者によって精選された29篇の短編小説が収められている。各作品を楽しめるだけでなく、リスペクトルの文学創作の軌跡や変遷についても辿れる、贅沢な作品集である。

リスペクトルの最初の短編小説「勝利」（1940）は、語り手が物語世界の外にいるが、ストーリーの大部分において、女性主人公の視点に重なり、主人公の視点が前景化する主観的な語りとなっている。主人公ルイーザは夫と口論し、夫が家を出てしまう。家に残さ

---

<sup>1</sup> Coelho (1993), p.174

<sup>2</sup> *Ibid.*, p.178

れ、翌朝目覚めると、以前から壁に飾られていた絵画の海の景色について、「これほどいきいきと動くような水を見たことがない」と、絵の存在に初めて気づく。孤独を感じるが、洗面所で顔を洗って気を取り直し、ダイニングルームで窓を開けると、新鮮な空気が吹き込む。裏庭に出て、盥で洗濯を終え、服を脱いで、冷たい水を浴び、「心臓が生命力あふれるリズムを刻む」のを感じる。物語では最後までルイーザの視点が前景化され、「あの人は戻ってくる。だって私は強い女だから」と確信した言葉で結び終える。この物語では、夫婦関係における予期せぬ事態へのルイーザの反応が、仕種、行動、感情によって詳細に描述される。主人公は、心の内に秘めた強い気持ちを表出させ、前向きに生きる姿勢を見せている。

「脱走」も、女性主人公の視点がほぼ前景化された主観的物語である。結婚 12 年目を迎えているが、ここでも夫婦関係が要因で、主人公は家を出て街中を歩いている。「すべてが生まれ変わりつつ」あり、「この 3 時間の自由が、ほぼ完全に彼女を再生させ」、夫から離れたことで、開放感に浸っている。しかし、街中は暗く、海は荒れて「黒々とした暗い水」をしており、「無限を隠している」ように見える。自由になることで、自分が変わってしまうことを恐れつつも「なぜ夫たちが良識なのか」と、妻の意見が尊重されない夫との関係に不満を抱く。冷たい雨の中を歩きながら、12 年の間に一度も空腹を感じたことがなかったことに気づく。自由な朝を迎えたいが、所持金は無く、結局、「何キロもの鉛のように重くのしかかる」日常に戻るしか選択肢が無い。遅い時間に帰宅するも、妻が何をしていったのか夫は気に留めようとしなない。

「勝利」と「脱走」に共通して見られる表現は、女性主人公の意識の状態が「水」によって象徴的に表現されていることである。

「勝利」では、冷たいシャワーが洗礼のように、主人公の思考に生命力を与えている。一方の「脱走」では、黒い雲から降る冷たい雨は、自由を得たいという願望はあるが、経済的な自立は難しいという現実の間を揺れ動く主人公の心情を示している。表現する対象が意識であるため、その言葉は、主人公の内部に向かっており、発話によって他者へ伝えられるものではない。小説『アグア・ヴィーヴァ(流れる水)』(*Água Viva*, 1973)は、一人称の語り手の意識が瞬間ごとに捉えられるため、物語全体としてのまとまりや秩序に欠けているが、そもそも人間の生は画一的に語れるようなものではない。

画家である主人公は、絵を描くこと、思考すること、書くことを並行して行っている。「私」である語りには常に〈あなた〉という他者の存在が意識されている。「私は泉や小さな湖、滝、あらゆる豊かな水の側にいる」<sup>3</sup>と感じながら、拘束されない自由な言葉で記述する。『アグア・ヴィーヴァ(流れる水)』における água (水) への意識・思考・書くという象徴的意味の付与は、リスペクトルの複数の初期作品から、すでに底流を流れていたことがわかる。

## 2. 社会が覆い隠しているもの

ブラジルの女性作家が文学界で確固たる地位を築くのは 20 世紀に入ってからである。文学者のカルロス・マグノ・ゴメスは、『ポストモダン小説における他者性』において、「彼女たち(女性作家たち)は、家父長制的資本制社会において、女性や周縁化される人びとが排除されるプロセスについて多様な考察をするのに、この場(文学の場)を使う」と述べ、クラリッセ・リスペクトル、リジア・ファグンジス・テーリス、リア・ルフト、ネリダ・ピニョンの作品分析を行っている。ゴメスは、「これら作家たちの女性登場人物は、芸術家であるとき、違反を犯す例であり、家父長制的社会によって引き継がれた規範を再解釈」し、「社会空間」を「自分の周囲の世界」として問う存在であると分析している<sup>4</sup>。ゴメスの考察は、女性登場人物を芸術家に限定しているが、4 人の作家の作品で描かれる多様な女性登場人物は、自己と他者の関係を通して、家父長制的資本制社会が公正な社会でないことを問うている。1960 年代末の欧米に端を発したフェミニズムや、軍事政権期(1964~1985 年)の権威主義体制は、この時期のブラジルの女性作家たちの作品に少なからず影響を及ぼしている。リスペクトルの作品では、政治や社会制度の問題を直接的な表現を使って問題化することはないが、人物の内面の知覚や葛藤、登場人物の関係性から、女性主人公を取り巻く社会構造や問題を読者に問いかける。

「お誕生日おめでとう」では、主人公の老女アニータの 89 歳の誕生日を祝うために家族が集まる物語である。アニータには息子が 6 人(長男はすでに死去)、娘が 1 人いて、娘ジウダの家族とコバ

---

<sup>3</sup> Clarice (1990), p.34

<sup>4</sup> Gomes (2010), p.p.11-12

カバーナの家で同居している。その日は、息子たちが、嫁や子供、孫、そして、乳母なども連れてお祝いにやってくる。しかし、誕生日会が始まるまで、アニータはリビングのテーブルで、化粧をして着飾ったまま、まるで忘れられた家具のように放っておかれる。宴が始まるまでには家族が徐々に到着するが、主賓のアニータは口をつぐんだまま、不愛想で、家族の目には、「中身は空っぽに」しか映らない。皆で誕生日の歌で祝い、ホールケーキにナイフを入れる段になると、アニータはナイフを握り、興味津々な全員の目前で、「人殺しの拳で入刀」するのである。その後、「なぜこんな、にこにこことひ弱で、厳格さの欠片もない生き物たちを産んでしまったのか」と、自分の家族であることを受け入れなくてはならないことに、怒りを抑えられず、床に向かって唾を吐き、暴言を発し、ワインを持って来るよう命じる。社会が一般に求める「優しいおばあちゃん」のイメージをことごとく打ち砕き、真逆の振舞いをして、自己を顕示する。アニータは、“家族”を演じる息子とその嫁への怒りを、偽善や形式にまだ毒されていない末息子の嫁コルデーリアが気づくように、老いて憤る身体にコルデーリアの視線を仕向けるのである。

物語は、社会で老人という存在が不可視化され、沈黙が強いられていることを明らかにする。資本主義社会では、生産年齢であることが重視され、一般的に老人は社会において周縁化される。男性の老化は成熟、熟年として肯定的にとらえられることもあるが、女性には、若さや美しさこそが価値であるという社会規範が押し付けられ、老齡期について語られることは少ない。ボーヴォワールは著書『老い』で、「老人たちはいかなる経済的勢力をも構成しないので、彼らの権利を主張する手段を持たない」、「老人が若い人々と同じ欲望、同じ感情、同じ欲求を示すと、彼らは世間の非難を浴びる」<sup>5</sup>と論じている。リスペクトルはこの物語で、老化した身体の表象が孤独、従属した場所に置かれている状況に焦点を当て、老いた者にも、複雑な感情や、時には矛盾し、意地の悪さや情熱があることを描く。本書の短編小説「尊厳を求めて」でも、女性の老いの問題を提起している。

---

<sup>5</sup> ボーヴォワール(2013), p.8



### 3. 他者の表象

リスペクトルの作品の特徴は、デビュー作から、人物の内面に重きが置かれ、政治・社会の問題について直接言及するのではなく、社会の仕組みを思念させていることである。リスペクトルの作風については、1960年代から1970年代前半に、新聞・雑誌のクロニカを定期的にかけていたことが、1970年代の作品に新しい方向性を決定づけたと考察されている（雑誌 *Senhor* (1962-1964)、雑誌 *Manchete* (1967-1968)、新聞 *Jornal do Brasil* (1967-1973))<sup>6</sup>。それまでの抒情的な作品から、現実的で時間の経過に沿ったリアリズム的な作品への変化である。具体的にはクロニカの特徴である、身近な主題、会話を採用している<sup>7</sup>。また、登場人物にも変化が見られ、1960年代までの、リスペクトルの作品の女性主人公は中流階級の主婦が中心であったが、貧困層、売春婦、家政婦等のように周縁化され、社会的抑圧を受ける人々にも焦点があてられるようになる。これは、ブラジル社会においても、伝統的に女性のモデルとされたのは中流階級の妻や母親であったが、1960年代から、女性の労働市場での進出、性の革命、マイノリティの社会運動が、女性のアイデンティティは1つではなく、人種、階級、出身地域、セクシュアリティなどが交差し、多様で、複雑で、不均質であることが認識されるようになったからである。リスペクトルは、こうして作家個人の経験とともに、社会の変化を作品に反映させた。

他者の表象について、文学者ヘジーナ・ダウカスタネは、ブラジル現代文学における大衆層の表象が欠如しており、中流階級出身の作家が中流階級の人物を描くことが多く、視点が限定されていると指摘する<sup>8</sup>。1970年代になると、例えば、フーベン・フォンセッカが社会的周縁者との社会的距離を縮めるために、彼らが語る一人称の物語を書くようになる<sup>9</sup>。ダウカスタネは、リスペクトルの作品について、「他者を代弁すること、他者に声を与えることの不可能性を明瞭に演出する」と述べ、『星の時』(*A hora da estrela*, 1977)の女性主人公マカベアの代弁者である語り手ホドリゴについて考察す

---

<sup>6</sup> Roncador (2002), p.61

<sup>7</sup> *Ibid.*, p.62

<sup>8</sup> Dalcastagnè (2012), p.18

<sup>9</sup> *Ibid.*, p.26

る<sup>10</sup>。

「家政婦の女の子」は、家政婦エレミータの物語である。彼女の容姿は醜くもなく、美しくもなく、ぼんやりとした存在である。育ちは悪いが、性格は悪くはなく、恥ずかしがりやで正直で、仕事もきちんとなしている。彼女は悲しくなると、内面世界に逃避し、自身の内面の森で誰も知らない泉の水を飲むと、安心して戻ってくる。語り手は、この平凡な人物について、自分にはよくわからないと言いながら、語りかけるような口調で、読者をエレミータに向き合わせる。

「P 語」は、フィクションとジャーナリズムを混合したような物語である。ミナスジェライス州に住む英語教師マリア・アパレシーダが、キャリアを積むべくニューヨークへ渡航するために汽車でリオデジャネイロへ上京する。彼女は前の座席にいる二人の男が、自分に関しての卑猥な会話をしている様子を耳にし、身体的な危険を察知する。パニックになり、車掌や警察に助けを求めるが、保護されるどころか投獄されてしまう。女性が言動や外見から軽視された様子を描いた悲惨な物語である。

「美女と野獣、または大きすぎる傷」は「愛」の続編のような物語である。リオデジャネイロの伝統的な家族の出身で、夫は銀行マン、3人の子持ちで、ハイソな女性カルラが、高級ホテルのコパカバーナ・パレスを出たところで、専属の運転手が到着していないことに気づく。タクシーに乗るか、頭を悩ませていたところ、松葉杖をついた片脚の物乞いに金を無心される。カルラは物乞いと会話をする間、自分の人生において「人生の勝利」や金持ちになることを求めていたことを振り返り、物乞いと類似性を見出す。そうして、これまで不公正で不平等な社会に目を背けてきたことを反省し、「もう二度と同じ人間には戻れない」、「彼は永遠に彼女の人生の一部となる」ことを引き受ける決心をするのである。

旧来の社会的通念や固定観念に囚われず、“生”のあり方を模索するリスペクトルの繊細な物語は、現在もなおブラジル国内外の読者を魅了し、新しい世代にも影響を与え続けている。秀逸に訳された本書には珠玉の物語が詰まっており、未だ女性や社会的弱者が生

---

<sup>10</sup> ”, p.36

きづらさを感じる複雑な私たちの現代社会において、読者は共感と勇気を得られるに違いない。

—参考文献—

- ボーヴォワール、シモーヌ・ド『老い』朝吹三吉訳(人文書院、2013)
- Coelho, Nelly Novaes. *A literatura feminina no Brasil contemporâneo*, São Paulo, Siciliano, 1993.
- Dalcastagnè, Regina. *Literatura brasileira contemporânea: um território contestado*, São Paulo, Horizonte, 2012.
- Gomes, Carlos Magno. *A alteridade no romance pós-moderno*, São Cristóvão, UFS, 2010.
- Lispector, Clarice. *Água viva*, Rio de Janeiro, Francisco Alves, 1990.
- Roncador, Sônia. *Poéticas do empobrecimento: a escrita derradeira de Clarice*, São Paulo, Annablume, 2002.



書評

拝野寿美子『継承ポルトガル語の世界  
—地域とつながり異文化間を生きる力を育む』

フェリッペ・モッタ

元来は世界中に散らばったユダヤ民族を指す用語であったディアスポラ（離散）は、人文社会科学において長らく用いられてきた。次第にアフリカ系、ギリシャ系、華僑などにも適用されるようになり、現在では国際的に移動し、世界各地で祖国との文化的、感情的、経済的な繋がりを維持するさまざまなコミュニティを指すために用いられている。

ならば、ブラジル人ディアスポラは、ブラジルから他国に移住したブラジル人、または越境の結果として形成されるコミュニティ全体と定義できる。移住の理由には、経済的機会の追求、政治的迫害の回避、教育、家族の再会などがあり、主要な移住先にはアメリカ合衆国、ポルトガル、パラグアイ、イギリス、日本が含まれる。多くのディアスポラ・コミュニティと同様に、在外ブラジル人も現地社会に適応しながら、言語や文化の違いによる課題に直面している。その中でも重要な課題の一つが母国語、すなわちポルトガル語の継承である。

継承語（*heritage language/ língua de herança*）は、家庭やコミュニティ内で親から子へと伝えられる、または移民や多文化社会で保持される言語と一般的に考えてよい。継承語は文化的アイデンティティやコミュニティの繋がりを維持する重要な役割を果たし、移民社会における文化遺産の保存に貢献していることも確実である。通常、親が自国の言語を家庭内で使用し、子どもがそれを学ぶことによって、言語が次世代に継承される過程が想定されるが、教室や教会のように継承を補助し、または促進する様々なアクターが存在する。

なお、言語は移民の第二世代やそれ以降の世代においても維持されることがあるが、社会的な圧力や教育システムの影響により失われる危険も存在する。親子のコミュニケーションのみならず、自己アイデンティティの構築の重要なファクターである継承語を次世代に継承させる仕組みはどのようなものなのか。

主にブラジル人ディアスポラに着目し、継承語としてのポルトガル語 (Português como Língua de Herança, PLH) の様相を取り上げる貴重な学術的貢献として、拝野寿美子の『継承ポルトガル語の世界—地域とつながり異文化間を生きる力を育む』(ナカニシヤ出版、2024年)が挙げられる。本書において、教育学を専門とする著者はポルトガル語母語話者が越境した後に直面する言語の継承という問題を分析している。拝野氏は、大学でのポルトガル語教育に携わっているが、本書は高等教育のみならず、幼少期から大学までのポルトガル語を継承する者、あるいは継承ポルトガル語教育に実際に関わっている人物および組織を取り上げている。2006年から2023年まで著者が実施した調査をもとに、世界で広がり、日本でも認知されはじめた継承ポルトガル語教育の内容や、それが個人や社会にどのような価値をもたらすかを考察している。

もちろん、継承ポルトガル語は日本の研究者にとって非常に意義深い課題である。1990年の入管法改正に伴い在日ブラジル人が急増し、リーマンショック直前の約30万人から2024年現在はおよそ21万人のブラジル人が日本で生活している(国籍別で考えると5位である)。「デカセギ」(decasségui)と通称されるこれらの者たちは、トランスナショナルな存在であるものの、滞在は長期化する傾向にあり、愛知県、静岡県、群馬県や滋賀県などにコミュニティを築いている。在日ブラジル人コミュニティは移住政策の研究のみならず、移民史研究の研究対象でもある。また、日本における多文化共生のケーススタディとして注視する必要がある、ブラジルおよびポルトガル語と関わる研究者はその仲介者となる。本書はこの状況を見据えた上で読まれるべきだろう。

本書は序章と終章を除き、2部6章から構成されている。序章において先行研究を概観し、継承語、とりわけ継承ポルトガル語の定義がなされている。「世界の継承ポルトガル語」と題される第一部において拝野氏はブラジル人の海外移住を俯瞰し、世界における継承ポルトガル語教育の概略を示す。第二部である「日本の継承ポルトガル語」において今度は在日ブラジル人コミュニティに焦点を当てる。このように、在日ブラジル人コミュニティの特有性(第二部)をより正確に把握するため、著者は世界における継承ポルトガル語の概観や個別具体的な事例(第一部)から考察を始めている。終章において拝野氏は今後の継承語教育に向けての課題と展望を綴

っている。なお、著者は「日本に多く存在するブラジル人学校においてはポルトガル語を子どもたちの第一言語、母語と想定して実施される教育であるため、本書で扱わない」（15頁）としている。

第一部は「ブラジル人の海外移住」（第一章）および「世界における継承ポルトガル語教育」（第二章）から成っている。ここにおいて著者は20世紀のブラジル人ディアスポラの概要を示し、インタビューおよび参与観察に基づいた北米（ボストン）および欧州（ロンドン）の事例を紹介しているが、それを通じて読者は著者の独自の研究成果だけではなく、英語やポルトガル語など、外国においてなされてきた研究に接することができる。

ところで、在日ブラジル人コミュニティ以外の事例はブラジル人ディアスポラの特異性を考える際に極めて重要である。移民研究において「ディアスポラ」という分析概念の有効性をめぐり多くの紙幅が費やされてきたが、なかんずく視点の問題が重視されるべきである。それについて、ロビン・コーエンとキャロリン・フィッシャーは下記のように述べている。（日本語訳は評者による）

In other words, the emic (the perspective of the subject) and the etic (the perspective of the observer) matters. Etic classifications of a perceived group as diaspora are based on a combination of certain defining features. Conversely, as an emic category of self-identification, the notion of diaspora is imbued with emotionally laden meanings that are intertwined with the specific history and experiences of the population in question.

他の言い方をすれば、エミック（調査される主体の側からの視点）とエティック（観察者の側からの視点）の両方が重要である。エティックの分類では、あるグループをディアスポラとして認識することは、特定の定義的特徴の組み合わせに基づいている。逆に、エミックの自己同定カテゴリーとしてのディアスポラ概念は、対象となる集団の特定の歴史や経験と絡み合った感情的な意味を帯びている。

(Cohen, Robin and Carolin Fischer (eds.), 2019. 'The Routledge Handbook of Diaspora Studies'. Abingdon, New York: Routledge, p.2)

継承ポルトガル語の教育を受けた者のみならず、教育の実践に携わっている人物の声を拾う拝野氏の貢献は、エティックな観点だけでなく、当事者ならではのエミックな視点も提供している。これにより、例えばブラジルから欧州に移住した人々で、もともとの祖先が当該地域であったことで市民権を獲得したブラジル人の感情や、北米に移り住んで他のラティーノと同視されたくないブラジル人の戦略など、ブラジル人ディアスポラの多様な実態が垣間見える。事例の分析を通じて、読者は継承ポルトガル語が決して同質なものではなく、地域的または時代的な多様性を示すことが理解できる。

第二部は「日本でポルトガル語を継承した青年たち」（第三章）、「日本における継承ポルトガル語教育」（第四章）、「日本で生き抜くための継承ポルトガル語教育」（第五章）、そして「継承ポルトガル語話者のとなりで」（第六章）から成る。ここで著者は、日本における継承ポルトガル語に焦点を当て、ポルトガル語がどこで学ばれているか、誰が継承ポルトガル語教育を担っているか、また教材がどのようなものであるかを紹介している。日本社会の現状に即した分析を通じて著者は長年の研究成果を展開しており、とりわけ当事者とのインタビューが印象に残る。継承語教育を通じてブラジルにルーツを持つ学習者に帰属感（*pertencimento*）を育む過程が事例を通じて明らかにされていく。

なお、日本以外のブラジル人ディアスポラとの比較が本書の強みである一方で、日本国内の他のマイノリティー集団との比較・対照の視点が不足している。著者は序章で在日コリアンコミュニティを対象とした言語文化教育に触れているが、その視点は後の分析には表れていないように感じられる。また、継承ポルトガル語を対象とする本書は、「言語」を支柱にしていない文化的伝承の営み（例えば、「阪大ふくふくセンター」と称される大阪大学複言語・複文化共存社会研究センター）を研究対象としていない。加えて、著者の重点がフィールドである在日ブラジル社会に置かれているため、ポルトガル語圏諸国のディアスポラの事例の言及に限られている。今後は在外ブラジル人以外のコミュニティとの比較対象や関係性の分析の研究が望まれる。序章をはじめとして本書はブラジル以外のポルトガル語圏諸国のディアスポラに言及しているが、在外ブラジル人コミュニティ以外との接合および比較が今度の課題として望まれる。



入管法改正から約 35 年が経過した。これまでに在日ブラジル人社会は大きく変貌してきた。「デカセギ」たちが定着し、成人している第二世代も存在する今日、継承ポルトガル語に注意を払い、その仕組みを理解することは、ポルトガル語／ブラジル研究に関わる者だけでなく、現代日本社会の在り方を考えたい者にとっても必須である。拝野寿美子の著作は、その先駆的な研究成果として貴重な貢献をもたらしている。今後の研究の展望に大いに期待したい。



## 書評

山本直子著『「多文化共生」言説を問い直す：日系ブラジル人第二世代・支援の功罪・主体的な社会編入』  
(明石書店・2024年)

拝野 寿美子

本書は、著者が2019年に慶応義塾大学大学院社会学研究科に提出した博士論文をもとにデータを更新して書き上げられたものである。

研究の目的は「日本社会で外国人の社会統合を考えるうえで多用されてきた『多文化共生』をめぐる言説について、日系ブラジル人第二世代へのフィールド調査から再検討を加えること」である(p.3)。そこには、調査地の自治体職員としての著者の経験に基づく、多文化共生という社会的な目標達成に向けた施策としての「外国人住民への支援」に対する問題意識がある。調査対象として在日日系ブラジル人第二世代を選んだ理由については、『日本人』と『ニューカマー外国人』というような二項対立的な視点を内包した多文化共生の限界と、人々の間に引かれる文化本質主義的な境界線の問い直しを社会に突きつける存在となりうる」とためと説明している(p.16)。

本書で議論されている愛知県豊田市のブラジル人集住地A地区をめぐる様々なレベルで見受けられる「多文化共生」の捉え方や施策には、日本人が持つ自明の優越感、パターンリズム、同化主義という視点が含まれている(p.227)。日本人住民が望む形での多文化共生はしばしば同化主義的であり、温情主義的であり、「支援する側、される側」という権力関係が立ち現れるマジョリティに管理されたものである。著者はそれを「何が『多文化共生』的であり、何がそうでないのか、という判断が日本人側にゆだねられているという状況の中では、居住地のエスニック・コミュニティは禁止や監視の対象ともなってしまう」(p.159)と警鐘を鳴らす。また、第二世代に対する「多文化共生施策における支援制度は、日本語という面に関しては一見、支援が手厚いようにみえる一方で、外国につながる子どもたちが抱える多様な問題を、『日本語教育によって解決できる』とし、それ以外の問題は、自己責任の範疇であり、自助努力で解決すべき事柄である」という論理を内包」していると鋭く指摘する(p.134)。

上記の課題を抱えている「多文化共生」の視点や施策に、A地区

に住む日系ブラジル人二世世代はどのように巻き込まれ、傷つき、抗い、利用し、生き延びているのか。本書はアレハンドロ・ポルテスおよびルベン・ルンバウトがアメリカの移民二世世代のホスト社会への編入の仕方として導き出した「分節同化理論」を分析枠組みとしながら (p.33)、19名の二世世代の若者、政治家、教育支援者などを含む7年間にわたって収集された57名のインタビューデータに基づき、以下の7つの章で構成されている。

研究の背景や目的、先行研究の検討、分析枠組みおよび調査方法が提示された序章に続く第1章「政府文書にみる多文化共生概念の展開」では、日本の外国人をめぐる状況を大きく変化させ、またその後の外国人政策の方向性を決定づけることとなった、1990年施行の改定「出入国管理及び難民認定法」(入管法)による社会の変化についての説明に加え、在日日系ブラジル人二世世代の日本での生活に影響を与えてきたと考えられる政府文書の内容の検討を通し、政府の多文化共生に対する姿勢の変遷が明らかにされる。

第2章「地域社会に浸透する多文化共生言説」では、愛知県豊田市を事例として、市議会議員や行政職員、地域住民の発言などから地域における多文化共生に関する言説が考察され、パターナリズム、同化主義、日本語支援偏重主義が地方行政において影響力を持ってきた点が指摘される。

第3章「支援の功罪」では、国や行政によって進められる多文化共生施策が二世世代に対してどのような影響を及ぼしてきたのかが明らかとなる。具体的には、二世世代の最も身近な社会である公立学校で多文化共生施策として実施されている日本語支援が彼/彼女らに果たす機能について、公立学校教員、日本語指導員、二世世代当事者の若者へのインタビューをもとに考察され、制度の不足や多文化共生施策に内在するパターナリズム、同化主義、日本語支援偏重主義がもたらす弊害が指摘される。

第4章「コミュニティとネットワーク」では、ポルテスらの「分節同化理論」において二世世代の社会統合に大きく貢献するエスニック・コミュニティが対象地域においてどのような役割を担っているのか明らかにされる。具体的にはA地区内で定期的に開かれる様々なイベント、プロテスタント教会やブラジル人同士の集まり、インターネットを介したトランスナショナルなコミュニケーションについて検討が加えられる。

第5章『『グローバル人材』言説が与える新たな立ち位置』では、大学や大学院への進学を果たす在日日系ブラジル人二世世代に着目する。はじめに、英語力を伸ばすことで自己肯定感を高めることができた複数の事例が提示される。次に、「日系ブラジル人」とであるというハイブリディティと、地域の国際化やグローバル人材育成の流れの中で重要視されるようになった英語教育との関連性に着目し、それらを政府のグローバル人材育成施策として設定されたスーパーグローバル大学の入試に戦術的に利用することで進学を果たし、社会上昇の機会を得た二世世代の様子が描かれる。

終章では、本書の学術的貢献と課題が説明される。貢献とされるのは、これまでは移民二世世代の社会適応や教育達成が困難である一因として第一世代の労働市場における立場や社会経済的な脆弱性が挙げられてきたが、本書でそれに加えて国や地域社会の多文化共生実現のための施策や人々の態度が、二世世代を取り囲む地域社会・学校・支援現場の姿勢に影響し彼／彼女らの社会編入を阻む要因にもなっていることが立証された点である。一方で、外国人散在地域における調査の必要性や調査協力者の属性の偏りが研究の課題として提示されている。

複数の視点から入念に調査・考察されている本書で評者が自戒を込めて伝えておきたいのは、「日系人」という定義の揺れである。本研究における「日系ブラジル人」は日本での定住を可能としている日本人移民の子である日系2世や孫の3世だけでなく、彼らの非日系人の配偶者も含む。つまり日本で合法的に就労・居住できる「在日ブラジル人」全体を指している (pp.21-22)。この記述により、本書における「日系人」はいったん血統的な限定を外される。その上で、「日系人」は多文化共生が前提としてきた「ニューカマー外国人」でありながら、1990年施行の改正入管法で公的に日本とのつながりを認められた存在でもあるという「日本人性」と「外国人性」を同時に強調する、可視化されたハイブリッドな存在であり、「在日日系ブラジル人二世世代は、多文化共生が前提とし対象としてきたものを根本的に揺るがす存在となり得る」(p.31)と表現される。ここで「日系人」の日本人との血統的なつながりが呼び戻される。「日系人」は本書において「多文化共生」に次ぐ重要なキーワードであるにもかかわらず、文中では「日系人」、「在日ブラジル人」、「日系ブラジル人」、「ブラジル人」という用語が互換的に使用されている。そし

て最後には、「彼／彼女らは二項対立を崩すような存在になっている  
とは言い難い」と結論付けられる (p.229)。この結論には納得がいく。  
在日日系人こそが多文化共生施策開始のきっかけとなった「ニュー  
カマー」の中心的な存在だからである。著者は「ニューカマー」を  
「ニューカマー外国人」と括り直して「ニューカマー」から「日系  
人」を外し、概念上その「日系人」を「日本人」と「ニューカマー  
外国人」の中間に位置付け直したが、現実には中間には位置づいて  
おらず「日系人」は引き続き「ニューカマー」に留まっているとい  
うことであろう。

著者が考える「日系人」の特性は、多文化共生をめぐる「日本人」  
対「ニューカマー外国人」という二項対立の現状を揺るがすほどの  
決定力を持つてはいなかった。「日本人でもなく外国人でもない、そ  
して、日本人でありつつ外国人でもある」(p.234)という著者が考え  
る日系人の中間性やハイブリディティを、政治家も地域住民も教育  
支援者も、そして研究対象の二世世代当事者さえも重視していなか  
った。日本人対外国人、日本文化対外国文化という二項対立的な視  
点を前提とした共生論に代わり、マイノリティにもマジョリティに  
も内在する多様性を自覚する方向に多文化共生の理想を設定する著  
者は、この多様性を体現する存在として二項対立を崩す契機となる  
可能性を日系ブラジル人二世世代に見出したのだが、当事者の発言  
にあるのは「日本生まれ」「日本育ち」であることや、自分が「ポ  
ルトガル語話者」で「ブラジル人」であるという「在日ブラジル人」  
(つまり在日外国人)を説明するものである。著者が先行研究で引  
用しているような、かつてブラジルに渡った日本移民の子孫である  
といった血統的・社会文化的な中間性やハイブリディティを示す内  
容ではない。「日系人」を対象としたこれまでの研究の焦点は、「日  
本人」との血統的・社会文化的つながりである。つながっているが、  
そのものではないという意味での「ハイブリディティ」や「中間性」  
は理解しやすい。「日系人とは」という問いが立てられ、そこに真正  
面から挑むアイデンティティ研究や言語文化研究などでこうした中  
間性やハイブリディティそのものが考察対象となる場合、当事者は  
「あなたは日系人である」との他者からの眼差しに対して迷ったり、  
同意したり、否定したりする余地がある。ただ、本書の調査対象で  
ある「在日日系ブラジル人二世世代」による、いわゆる日本人移民  
の子孫であり家庭生活においても日本語や日本文化に多少なりとも

親和性がある、その上で、ブラジル文化も身に付けたりポルトガル語も理解できるといった「日本人でもあり外国人でもある」というハイブリディティが見受けられる発言は、本書では見受けられない。反対に、ポルトガル語を母語に持つことで日本人よりも優位に立てる英語の習熟を進路選択で戦略的に活用したり、日本人を相手に「英語話者」となって、つまり、日本語しか話さない日本人でもポルトガル語を話すブラジル人でもないことを装いながら「ガイジンごっこ」でその場を楽しんでいたりする姿からは、彼／彼女らが自身と「日本人」の間に（もしかするとブラジル人との間にも）境界線を引いて「ニューカマー外国人」カテゴリーへの帰属を進んで選択しているようにも見える。そのような選択も含めて「マイノリティの多様性」なのであろうか。「日系人」を対象に研究する者は、「日本人」と「ブラジル人」（あるいは「外国人」）の血統的・社会文化的な中間性に着目しがちであるが、研究者がそこに見出すエスニックな希少性が当事者にはそれほど強く意識されていない可能性があることにも、改めて留意が必要であると再認識した。

日系人研究の難しさを述べはしたが、7年という歳月をかけて、行政職、研究者、一住民という異なる立場から蓄積し培った人間関係やインフォーマントとの信頼関係から得られたデータが貴重であることに変わりはない。そして、そこから導き出された多文化共生施策の功罪、その一環としての日本語支援への偏重や支援の現場ではびこる権力関係といったホスト社会が直視すべき課題群、そうした不利な状況においても第二世代を社会統合へと導くエスニック・コミュニティの貢献、第二世代の若者たち自身の努力や機転など、本研究の根幹となる研究成果の妥当性について疑う余地はない。分析軸についても新規性が見受けられる。本書で考察されているSNSを介したブラジルの親戚やブラジルの最新事情への頻繁なアクセスによるトランスナショナルなネットワーク形成である。着実にこの視点を研究に取り入れて第二世代の今を描き出した本書の功績は大きい。これからの若者研究で不可欠な視点であることが改めて浮き彫りとなった。

本書は著者が行政職員時代に抱いた疑問に始まり、その後結婚を機に東京に移り住んだ後に幼い子どもを抱えながら調査のために再び豊田市に住み込むほど、ぶれない、魂のこもった得難いデータに基づく研究成果である。女性であったり子連れであったりするマイ

ノリティ性に歯噛みをしながらも、それを逆手にとって調査を進めていく旺盛な研究意欲、高い問題意識に改めて敬意を表す。



書評

ヴァレーラ、ドラウジオ（伊藤秋仁訳）  
『女囚たち—ブラジル女性刑務所の真実—』  
水声社、2023年、302p.

渡会 環

本書の概要

本書は、2017年に出版されたドラウジオ・ヴァレーラの *Prisioneiras* の全訳である。著者のヴァレーラはサンパウロ市出身の医師で、1989年よりボランティアの医師としてサンパウロ州内の拘置所・刑務所で診療にあたってきた。彼はその経験を3つの本にまとめ、Companhia das Letras から出版している。いわば3部作の1作目となるのが *Estação Carandiru* (1997年出版) で、一般的にはカランデルとして知られる「サンパウロ拘置所 (Casa de Detenção de São Paulo)」でのボランティア経験を記した。2作目は、同じカランデルを舞台としながらもそこで働く刑務官らに注目した、*Carcereiros* (2012年出版)、『看守たち』である。最後の3作目 *Prisioneiras* は、2006年よりボランティアを始めた「サンパウロ女子刑務所 (Penitenciária Feminina da Capital)」での経験をまとめている。2作を経たこともあってか、3作目では女性刑務官の労働環境の問題についても言及している。1作目と3作目が京都外国語大学伊藤秋仁教授によって日本語に訳され、水声社より1作目が2021年に『カランデル駅—ブラジル最大の刑務所における囚人たちの生態—』、3作目が2023年に『女囚たち—ブラジル女性刑務所の真実—』として出版されている。

『女囚たち—ブラジル女性刑務所の真実—』の構成だが、基本的には女子受刑者の生活世界を理解するためのキーワードをタイトルにそれぞれのセクションがもうけられており、各セクションには診察の場でヴァレーラが聞いた女子受刑者たちのライフストーリーが収められている。彼女たちのライフストーリーは様々であるが、いずれも、社会階層、ジェンダー、セクシャリティ等によって差別を生じさせる現代ブラジル社会構造の影響が強くみられ、この構造が鮮やかに描き出されていることに本書の最大の特徴がある。

## 二重の「監視」下におかれる女囚たち

刑務所では一般的に、囚人たちは当局の監視下におかれる。だが、本書で扱われるサンパウロ州の女子また男子刑務所では、犯罪組織の州都第一部隊（Primeiro Comando Capital: PCC）が、真の「監視」を行っている。当局の「監視」は、点呼や視認、房の解錠や施錠、などに限られる。18世紀から19世紀への転換期における監獄をはじめとする軍隊、病院、学校などに広がる「監視」の特徴を精査したフーコー（1977）は、「処罰」とは規則違反を罰するよりも義務の反復を強制させることであり、つまり、規律・訓練が権力の技術となっている点を指摘した。『女囚たち—ブラジル女性刑務所の真実—』で女子受刑者に権力を振るうのは、以下に述べるように、PCCであり、その規律・訓練を彼女たちは受けている。

PCCはそもそも1992年にカランヂルでおきた囚人111名の虐殺をきっかけに、拘置所や刑務所での抑圧の撲滅を目的の一つとして設立された。しかしながら、PCCは拘置所や刑務所内部での規律を徹底していくこととなる。独自の裁判制度たるものも確立し、武器や私刑の禁止などの禁止事項も定めている。この禁止事項があること自体が、受刑者の間でのトラブルの発生を抑止している。ヴァレーラがカランヂルでボランティアを始めた頃には私刑が頻繁で、ナイフの保持などがみられたが、女子刑務所で始めたとき、男子刑務所も含めて、それらの問題がみられなくなっていた。それほど「監視」が徹底している。

なお、サンパウロの女子刑務所では、PCCのメンバーである「姉妹たち」が男性幹部からの「お達し」を伝える。彼女たちは女子刑務所では「リーダー」であっても、男性幹部に対しては、彼らの指示にただ従う立場である。なお、同性愛者は「姉妹」になることができない。「姉妹たち」は、組織への従順な「女性」としてその身体を作り上げられているのである。

PCCが有する権力の技術が「姉妹たち」の組織への従順な身体を作り出すのは、出産援助金や、日々の生活もままならない「姉妹たち」の家族への生活必需品一式の提供など、ブラジル政府並み・あるいはそれ以上の形で行われる「社会福祉」も通じてなされる。

この「姉妹たち」により、犯罪組織に入っていない女子受刑者たちもまた、子どもを虐待した者には冷淡な扱いや侮辱がなされるように、男性幹部が定めるジェンダー規範の影響を受ける。

### 女子受刑者の生活世界

女子受刑者にとって、犯罪組織の存在は刑務所外でも「身近」であった。彼女らの多くが、貧困から犯罪組織との関わりをもち、薬物取引などの罪で刑務所に入ることになった。相互主観的な世界である「生活世界」（シュッツ・ルックマン 2015）という概念が注視するのは個人の経験や知識の社会化という側面であるが、彼女たちの経験や知識の社会化に犯罪組織での規律・訓練が関係しているのである。

この女子受刑者の生活世界は、犯罪組織との関わりがない市民にとって「別世界」のものであるというわけではない。刑務所は「社会を映す鏡」（矢野 2014: 23）であり、女子受刑者の犯罪に社会が課すジェンダーの問題がどのように関わっているか、日本でもアジア女性資料センターが『女たちの 21 世紀』80 号で「女子刑務所—これからの処遇・医療・福祉を考える—」という特集を組んで考察している。ブラジルと同様、日本でも女子受刑者の罪名として増えているのが薬物取引であるが、犯罪に関わる男性との交友関係を通して行われたものが多い（松本 2014）。

好ましくない交友関係に女性たちが放り込まれるのは、本書でも明らかにされているように、幼少期のネグレクトや性的な暴力、夫からの家庭内暴力といったジェンダーの不平等に起因する「暴力」を受け、家庭環境に恵まれなかったことが大きい。矢野（2014）は、国を問わず、女子受刑者には彼女たちの被害者性も高いと指摘しており、ジェンダーの視点を取り入れて、受刑者を取り巻く社会の差別構造を明らかにしようとする。同じことをヴァレーラも本書で行っていると指摘できる。

ジェンダーの不平等は別の形でも表れる。家族やパートナーは男子受刑者への個別訪問を欠かさないのに対し、女性の場合だと収監を機に関係を絶ってしまったりすることも少なくないという。そうした愛情不足だけが理由ではなく、同性だけがいるという女子刑務所の空間の特異性、さらにはジェンダーに起因する社会でのセクシヤリティの抑圧等が絡み合い、女子刑務所では同性愛が多くみられ、同じ受刑者であるパートナーからの愛情を受けて生活している。

### 訳者による解説「文化人類学としての書」

訳者の伊藤秋仁氏は本書を「文化人類学としての書」と評してい

る。医師としていわば社会のエリートであるヴァレーラが周縁層出身の女性たちに寄り添い、犯した罪や人生、そして心情までも、彼女たちに語らせることができた、その語りを引き出す能力を評価しているからである。

その能力についてここでさらなる考察を試みたい。本書の最後でヴァレーラ自身が述べているが、彼は「医師」の仕事セラピーと認識していた。この認識をもって診察にあたってきたことも、彼女たちから語りを引き出すことができたといえる。女子受刑者は彼を「医師」として接してはいたが、一人の女子受刑者が「あたしの人生の話をきいてくれた」と言っていたことも示しているように、実際には「セラピスト」的な存在に近かったのではないだろうか。そもそも、医療機器がほとんどない刑務所内での医療行為には限界がある。受刑者は「医師」としての彼に敬意を払い、「セラピスト」としての彼に心を開いた。そうでなければ、本書で鮮やかに記録された語りは彼女たちから一生つむぎだされることはなかっただろう。

「能力」以外にも、ヴァレーラ自身の「努力」も本書からはうかがえた。2 作目で扱った看守たちとは定期的に飲み交わすなどして、「医師」であるがゆえに看守たちが保っていた彼からの心理的な「距離」を縮めたことも、本書では述べられている。

さらにもう一つ、「文化人類学としての書」としての評価を加えるならば、ヴァレーラが本書を通じて自身のポジショナリティを明確に示している点である。人類学者はフィールドで透明な存在ではないし、「書く」という特権的な立場にある。(クリフォード・マーカス 1996)。本書はボランティア初日に医師として女子刑務所に入っていく場面から始まり、医師として彼を刑務官が出迎える様子が書かれている。医師である彼に誠意をもって接する女子受刑者の様子も描かれ、ときに「男性」として受けた視線についても書かれている。さらに、本書は、ヴァレーラが彼のライフストーリーを読者と共有する形で締めくくられている。

### おわりに

本書の最後に収められた彼自身のライフストーリーで語られているのは、幼い頃に犯罪者を題材としたラジオドラマを叔父と聞いていたこと、生まれ育ったサンパウロ市にある暗黒街を訪れてみたこと、彼の成長に合わせる形で都市もまた一層成長を遂げるなか犯罪

そのものの質がかわってきたこと、である。都市の「暴力」の中で女性が最大の被害者であることも、ヴァレーラは訴えている。

都市の「暴力」には健康な生活を営む権利が十分に保障されていないことも含まれるが、そうしたものは誰も受けてはならない「暴力」だと、今日のヴァレーラは考え、行動しているようである。

「健康について全ての人々に向けた情報提供 (Informação Sobre Saúde para Todos)」と副題をつけたポータルサイト *Portal Drauzio Varella* を現在、運営している。記事や映像を通じて、健康維持のための具体的なアドバイスや、症状から考えられる疾患についての説明など、健康な生活を営むための多様な情報を無料で発信している。

最後に、日本での出版に伴い、つけられた帯について批判したい。そもそも本書が学術的な書ではないこともあってか、帯には「ようこそ気狂い女どもの館へ」という表現が使われている。「気狂い女どもの館」自体は、ヴァレーラが女子刑務所でボランティアを始めた日に男性職員に言われた一言ではある。だが、ここまで述べてきたように、「気狂い」としてブラジル社会の「特殊な存在」として捉えてしまったら、ジェンダー、セクシャリティ、人種、社会階層などが複雑に絡み合い女性たちを社会において不当な立場に置いてしまう現代ブラジル社会の構造を、この本を手にするだろうブラジルについて学び始めた学生やその他の読者が理解することは不可能となる。

### 引用文献

- フーコー、ミシェル(1977)『監獄の誕生—監視と処罰—』田村俣訳、新潮社。
- シュッツ、アルフレッド、トーマス・ルックマン(2015)『生活世界の構造』那須壽訳、ちくま学芸文庫。
- クリフォード、ジェイムズ、ジョージ・マーカス編(1996)『文化を書く』春日直樹ほか訳、紀伊国屋書店。
- 矢野恵美(2014)「海外における女性受刑者の処遇の状況—スウェーデン・英国の例—」(『女たちの21世紀』no.80 12月号) 22-26 ページ。
- 松本卓也「『女子刑務所』の診察室からみえること」(『女たちの21世紀』no.80 12月号) 28-33 ページ。

## —役員一覧—

会長	伊藤秋仁	(京都外国語大学)
理事 (五十音順)		
	Pedro Aires	(京都外国語大学)
	市之瀬敦	(上智大学)
	江口佳子	(常葉大学)
	野中モニカ	(天理大学)
	拝野寿美子	(神田外語大学)
	坂東照啓	(大阪大学)
	水沼修	(東京外国語大学)
	渡会 環	(愛知県立大学)
監事 (五十音順)		
	上田寿美	(京都外国語大学)
	岐部雅之	(京都外国語大学)

## —執筆者一覧— (執筆順)

彌永史郎	(京都外国語大学)
Pedro Carlos Freitas Aires	(京都外国語大学)
上田寿美	(京都外国語大学)
岐部雅之	(京都外国語大学)
黒澤直俊	(東京外国語大学)
伊藤秋仁	(京都外国語大学)
江口佳子	(常葉大学)
フェリッペ・モッタ	(京都外国語大学)
拝野寿美子	(神田外語大学)
渡会 環	(愛知県立大学)